

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2014年 3月

「キリストの性質—受肉の期間—(IV)」 「義認と聖化を通してキリストを映す」

「第二天使のメッセージ『罪と罪人からの分離』」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「キリストの性質—受肉の期間— (IV)」 4

朝のマナ

「義認と聖化を通してキリストを映す」 7
キリストを映して

現代の真理

「第二天使のメッセージ- 罪と罪人からの分離」 70
三重のメッセージ

力を得るための食事

「かぼちゃの南蛮漬け」 76

お話コーナー

「子供がもの申す!」 82

教会

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465
FAX: 0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖繩集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス

ホームページ：<http://www.4angels.jp>
メール：support@4angels.jp

発行日 2014年2月28日
編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション
〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: HighRes on front cover; Getty Images
on page 7

これらのものの上に信仰が

この救については、あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。(ペテロ第一 1:8～12)

キリストは、聖書の歴史のアルファであるモーセの書から始めて、聖書全体を通じて、ご自身に関する事柄を解説された。……彼らは、旧約の型と預言を通して、キリストについてたてられているあかしを理解する必要があった。これらのものの上に彼らの信仰が築かれねばならない。キリストは、彼らをさとらせるのに奇跡を行なわれず、聖書を説明することがその最初の働きであった。……イエスは、ご自分の死こそ、彼らの信仰の最も強力な証拠であることを預言者の書からお示しになった。……

救い主は、新約聖書と同じようにはっきり旧約聖書の中にあらわされている。キリストの生涯と新約聖書の教えをはっきりと美しく浮かび出させるのは、預言時代から出ている光である。キリストの奇跡は、その神性の証拠である。しかし、イエスが世のあがない主であるというもっと強力な証拠は、旧約の預言を新約の歴史に照らしあわせることの中に見いだされる。預言から論じて、キリストは弟子たちにご自分が人としてどういうおかたであるべきかについて正しい概念をお与えになった。人々の希望通りに王位と王権をとられるメシヤを、彼らが期待していたことから誤解が生じていた。それは、最高の地位から最低の地位までキリストがおくだりになったことについての正しい見解と矛盾するのであった。キリストは、弟子たちの考え方がこまかい点にいたるまで純粋であり、また真実であるように望まれた。(各時代の希望下巻 333,334)

世の人々にいのちを与えるキリストのいのちは、そのみことばのうちにある。……キリストは、旧約のすべての預言者たちと教師たちとを通して語られたように、神のみことばをお語りになった。聖書全体はキリストを表わすものであって、救い主は、ご自分に従う者の信仰をみことばの上に固くすえようと望まれた。キリストの目に見える存在がとり去られたとき、みことばが彼らの力のみなもとでなければならぬ。(各時代の希望中巻 140)

贖罪

キリストの性質—受肉の期間—(IV)

VII. キリストの人性の完全な罪のなさ

わたしたちはキリストの人性の完全な罪のなさに関して疑念を与えるべきではない。わたしたちの信仰は、完全な信頼、すなわち贖罪の犠牲を十分にあますことなく信じる信仰のうちにイエスを仰ぐ知的な信仰でなければならない。これは魂が闇に取り囲まれることがないために不可欠である。この聖なる身代わりは最高にまで救うことができる。なぜなら、このお方は驚く宇宙の前に、ご自分の人性の品性において完全かつ完璧なへりくだりと、神のすべてのご要求への完全な従順を提示されたからである。(サイン・オブ・タイムズ 1898年6月9日)

キリストはご自分の人性の腕をもって人類を抱き、ご自分の神性の腕をもって、無限の方の御座をつかんで、有限な人間を無限の神に結びつけておられた。このお方は罪の生じた深淵に橋をかけ、地を天と結ばれた。このお方の人性のうちこのお方はご自分の神聖なご品性の純潔さを維持された。(ユース・インストラクター 1898年6月2日)

このお方は墮落に汚されることがなく、罪を知らないお方であった。しかしなお、このお方は祈られた。そしてしばしば強い叫びと涙をもって祈られたのである。このお方はご自分の弟子たちのために、またご自身のために祈られた。こうして人類にごくあたりまえのわたしたちの必要、弱さ、欠点を共にされた。

このお方はわたしたちの人間の情欲や墮落した性質をもってはおられなかったが、同じ弱さを身に負い、あらゆる点においてわたしたちと同じように誘惑された。イエスはご自分の御父からの助けと支えを必要とする苦悩に耐えられた。(教会への証 2巻 508)

このお方はわたしたちの弱さにおいて兄弟であられたが、同様な情欲はもっておられなかった。罪のないお方として、このお方の性質は悪に後ずさりされた。このお方は罪の世において魂の苦闘と拷問に耐えられた。このお方の人性は祈りを必要とし、また特権とされた。このお方は御父がこのお方に、すなわち人の益のために天の喜びを去り、冷たく感謝のない世界にご自分の住まいを選ばれたお方にいつでも与えようとしておられた、より強力な神聖の支えと慰めをことごとく

必要とされた。(同上 202)

このお方の教理は雨のように落ちた。このお方の語られることは露のように滴った。キリストのご品性のうちに、神がかつて墮落した人類に表されたことがないほどの大権と、人がかつて発達させたことがないほどの柔和とが混じり合っていた。かつて人のうちに、これほど気高く、純潔で、善意に満ち、ご自分の神聖なご性質を意識しておられた者はなかったが、これほど飾り気がなく、人類に善をなすためのご計画と目的に満ちている者もなかった。罪は忌み嫌われたが、その一方罪人に同情して涙を流された。このお方はご自分を喜ばせられなかった。天の大君はご自分の身にこの謙遜さをまよっておられた。これがキリストのご品性である。(同上 5 巻 422)

イエスの一生は神と調和した生涯であった。子供の時分には子供のように考え、子供のように語られた。しかし、イエスのうちにある神のみかたちを傷つける罪のあとにはなかった。それでも彼は試みからまぬかれてはおられなかった。……イエスはその品性を試みられるような場所におかれた。イエスはご自分の純潔を保つためにたえず警戒しておられる必要があった。イエスは子供の時にも青年の時にもおとなになってからも、われわれの模範となるために、われわれが出会わねばならないあらゆる戦いに会われた。(各時代の希望上巻 64)

人の墮落した状態の人性をご自分の身に負われたが、キリストはほんのわずかといえどもその罪にあずかられたことはなかった。このお方は人間が取り囲まれている虚弱や弱さの下にあられたが、「これは、預言者イザヤによって『彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた』と言われた言葉が成就するためである」。このお方はわたしたちの弱さを思いやることのできるお方であり、あらゆる点においてわたしたちと同じように誘惑に会われた。それでいながらなお、このお方は「罪を知らな」かった。このお方は「きずも、しみもない」小羊であられた。……わたしたちはキリストの人性の完全な罪のなさに関して疑念を与えるべきではない。(サインズ・オブ・タイムズ 1898 年 6 月 9 日)

キリストだけが、神聖な律法の要求に等しい捧げ物をささげることによって、道を開くことがおできになった。このお方は完全であり、罪によって汚されていなかった。このお方にはしみもきずもなかった。罪の恐ろしい結果の範囲は、無限の価値の救済策が備えられていなければ、決して知ることはできなかった。墮落した人類の救いは、天使たちが驚き、神に等しい天の大君が反逆の人類のために死ななければならないという神聖な奥義を十分には理解できないほどの巨大

な代価をもって買われた。(預言の霊 2 巻 11, 12)

罪というらい病もこれと同じである、一それは根強く、致命的で、人間の力できよめることはできない。「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで、完全なところがなく、傷と打ち傷と生傷ばかりだ」(イザヤ書 1:5, 6)。しかしイエスは、人類の中に住むためにおいでになって、何のけがれもお受けにならない。イエスの前に出ることは罪人にとっていやしの力がある。(各時代の希望上巻 335)

イエスはしばらくその光景一恥ずかしさにうちふるえている被害者と人間的なあわれみの情さえないこわい顔つきをした高官たちとをながめておられた。けがれのないイエスの純潔な心はその光景にすくんだ。この問題がどんな目的で自分のところへ持ち込まれたかを、イエスはよくご存知だった。イエスはみ前にいる一人びとりの心を読み、その品性と経歴を知っておられた。……告発者たちは敗北した。いま聖潔をよそおった彼らの衣は引きはがされ、彼らは限りない純潔そのものであられるおかたの前に、不義と罪に定められて立っていた。(各時代の希望中巻 246, 247)

VIII. キリストは人性を永遠にもっておられる

身をひくくして人性をとることによって、キリストはサタンの品性と反対の品性をあらわされた。……救い主は、われわれの性質をおとりになることによって、決してたちぎれることのないきずなでご自分を人類にむすびつけられた。永遠にわたって、キリストはわれわれとつながっておられる。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛してくださった。」(ヨハネ 3:16)。われわれの罪を負い、われわれのいけにえとして死ぬために、神はみ子をお与えになっただけではない。神はみ子を墮落した人類にお与えになったのである。神は不変の平和のはからいを保証するために、ご自分のひとり子を与えて人類家族の一人とならせ、永遠に人間の性質をみ子のうちに保たせられた。これこそ神がご自分のみことばを成就される保証である。「ひとりのみどり子がわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり」(イザヤ書 9:6)。神はみ子自身のうちに人間の性質をとり入れ、これを一番高い天にまで持ちつづけさせられた。(各時代の希望上巻 10, 11)

キリストを映して

Reflecting CHRIST



3月 「義認と聖化を通してキリストを映す」

3月1日

信仰による義認 —わたしたちの唯一の希望—

「もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる。彼は、わたしたちの罪のための、あがないの供え物である。ただ、わたしたちの罪のためばかりではなく、全世界の罪のためである。」(ヨハネ第一 2:1, 2)

神のみ前に深く悔い改めた罪人が、自分自身のためのキリストの贖罪を認め、この贖罪を今の生活及びこれからの生活の唯一の希望として受け入れるとき、彼の罪は許される。これが信仰による義認である。信じる魂はみな、自分の意志を完全に神のご意志に同化させ、あがないの主の贖罪の功績を信じる信仰を働かせながら、力から力へ、栄光から栄光へと前進しつつ、悔い改めと悔悟の状態を保たなければならない。

許しと義認は一つであり同じことである。信じる者は信仰によって反逆者、すなわち罪とサタンの子供という立場から、キリスト・イエスの忠実な臣民という立場へと移る。それは生まれつきの善のゆえではなく、キリストが養子縁組によって彼をご自分の子として受け入れて下さるがゆえである。罪人は自分の罪の許しを受けるが、それは自分の身代わり、担保であるお方がこれらの罪を負ってくださったからである。主は御父に語って「これはわたしの子です。わたしは彼の身代わりとなって彼の罪のために苦しみを受けたので、わたしの生命保険証書—永遠の命—を与えて、彼を死の有罪宣告から執行猶予にしました。これはわたしの愛する子です」と言われる。こうして許され、キリストの美しい義の衣を着せられた人は、神のみ前に欠点のない者として立つのである。

罪人は間違いを犯すかもしれないが、憐れみなしに捨てられることはない。

しかしながら、彼の唯一の希望は、神への悔い改めと主イエス・キリストを信じる信仰である。わたしたちの違反と罪を許すのは御父の大権である。なぜならキリストがご自身の義を着せて、わたしたちの罪をご自身に負い、わたしたちを執行猶予にくださったからである。このお方の犠牲は正義の要求を完全に満たしている。

義認は有罪宣告の反対である。神の限りないあわれみはまったく受けるに値しない者に向かって働く。このお方は、わたしたちの罪のためのあがないの供え物となってくださったイエスのゆえに、不法と罪をお許しになる。キリストを信じる信仰を通して、有罪の違反者は、神の恩寵へ、また永遠の命の強い希望へ入れられるのである。(SDA バイブル・コメント [E.G. ホブ・コメント] 6 卷 1070, 1071)

罪人はイエスの功績によって義と認められる。そしてこれは人のために払われたあがない代が完全であることに対する神の承認である。キリストが十字架の死に至るまで従順であられたことは、悔い改めた罪人が御父に受け入れられることの担保である。(サインズ・オブ・タイムズ 1892 年 1 月 4 日)

3月2日

悔い改めた罪人は キリストのうちに受け入れられる

「ところが、キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造った聖所にはいらなくて、上なる天にはいり、今やわたしたちのために神のみまえに出て下さったのである。」(ヘブル 9:24)

キリストはわたしたちの犠牲、わたしたちの身代わり、わたしたちの担保、わたしたちの神なる仲保者であられる。このお方はわたしたちのために義認、聖化、あがないとなられた。「ところが、キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造った聖所にはいらなくて、上なる天にはいり、今やわたしたちのために神のみまえに出て下さったのである。」

わたしたちのためのキリストのとりなしは、わたしたちの身代わりまた保証としてご自身を御父へお捧げになることによって、ご自分の神聖な功績を差し出すことである。なぜならこのお方はわたしたちの違反の贖罪をするために上に昇られたからである。……「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある」(ヨハネ第一 4:10)。「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである(ヘブル 7:25)。

これらの聖句から、あなたが信頼せず、神はあなたが罪深く価値がないゆえにあなたをお受け入れにならないのではないかと恐れて自分の魂を苦しめることは神のみ旨ではないことが明らかである。……あなたの問題をこのお方のみ前に提示し、カルバリーの十字架上であなたのために流された血の功績を嘆願しなさい。サタンはあなたを大変な罪人であると告訴するであろうし、またあなたはこれを認めなければならないが、次のように言うことができる。「わ

たしは自分が罪人であることを知っています。そしてそれこそわたしが救い主を必要とする理由です。イエスは罪人を救うためにこの世に来られました。『御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである』。……わたしには、救いを主張できる功績や善はありませんが、世の罪を取り除くしみのない神の小羊の、すべてを贖う血を神のみ前に差し出します。これがわたしの唯一の嘆願です。イエスの御名によって、わたしは御父の許へ行くことができます。このお方の耳、その心はわたしの弱々しい嘆願に対して開かれており、わたしの最も深い必要を満たしてください」。

悔い改めた罪人を神に受け入れられるものとし、彼の義認を実現するのは、キリストの義である。彼の人生がどれほど罪深くて、もし彼がイエスを自分の個人的な救い主と信じるなら、彼はキリストの着せられた義というしみのない衣を着て神のみ前に立つのである。

つい最近、罪過と罪のうちに死んでいた罪人が、キリストを信じる信仰によってよみがえらせられる。彼は信仰によってイエスが自分の救い主であり、永遠に生きておられ、ご自分によって神に来るすべての者を完全に救うことができになることを見る。自分のためになされた贖罪のうちに、信じる者は、効力が非常に広く、長く、高く、深いことを見、このような無限の代価をもって買われた救いが非常に完全であることを認めて、その魂が賛美と感謝で満たされるのである。(サインズ・オブ・タイムズ 1892年1月4日)

3月3日

わたしたちはキリストのうちにあって完全

「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、彼は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。」(ヨハネ第一 1:9 英語訳)

罪人がイエスの比類のない魅力を眺めるとき、罪は彼にとってもはや魅力的なものに見えない。なぜなら彼は万人に抜きんでたお方、すなわち、ことごとく美しいお方を眺めるからである。彼は個人的な経験によって福音の力を自覚する。その計画の広大さに匹敵するのは、ただその目的の尊さだけである。

わたしたちには生きておられる救い主がおられる。このお方はヨセフの新しい墓の中におられるのではない。死からよみがえり、信じる魂一人びとりのために身代わりまた担保として天に上られたのである。……罪人はイエスの功績によって義と認められる。そしてこれは人のために払われたあがない代が完全であることに対する神の承認である。キリストが十字架の死に至るまで従順であられたことは、悔い改めた罪人が御父に受け入れられることの担保である。そうであれば、わたしたちは疑っては信じ、信じては疑うというような揺れ動く経験を自分に許すのであろうか。イエスはわたしたちが神に受け入れられるという誓約であられる。わたしたちは自分自身のうちにある何かの功績ではなく、「主われわれの義」を信じる信仰のゆえに、神のみ前に恩寵のうちに立つのである。

イエスはわたしたちのために至聖所で神のみ前に出ておられる。そこでこのお方はご自分のうちにあって完全なご自分の民を毎瞬間、差し出すことをお止めにならない。しかし、わたしたちが御父の前にこのように提示されるからといって、このお方の憐れみにつけこみ、不注意、無関心、自己放縱になってもよいと考えるべきではない。キリストは罪に仕えるお方ではない。わたした

ちは信仰によってこのお方のうちに宿るときのみ、このお方のうちにあつて完全であり、愛されるお方のうちに受け入れられているのである。

わたしたちは自分自身の良い働きによって完全に到達することは決してできない。信仰によってイエスを見る魂は、自分自身の義を拒絶する。彼は自分を不完全なものとし、自分の悔い改めを不十分なもの、自分の最も強い信仰も弱々しく、自分の最も高価な犠牲も貧弱なものだとみなし、へりくだりのうちに十字架の足元に沈む。しかし、神の御言の託宣から彼に向かって声が聞こえる。彼は驚いてメッセージを聞く。「あなたは彼にあつて完全である」(コロサイ 2:10)。今や、すべては彼の魂のうちに安らかである。もはや自分自身のうちに、何か価値のあるもの、神の恩寵を得るための何か報酬に価する行為を見つけようともがく必要がない。

世の罪を取り除く神の小羊を眺めることによって、彼はキリストの平安を見出す。なぜなら、許しが彼の名前のところに書き込まれ、彼は次の神のみ言葉を受け入れるからである、「あなたは彼にあつて完全である」。長い間疑いを心に抱き続けてきた人類にとって、この偉大な真理をつかむことはどれほど困難なことであろうか!しかし、それが魂にもたらす平安は、なんと活力に満ちた命をもたらすことであろう!(サインズ・オブ・タイムズ 1892年1月4日)

3月4日

キリストの血は わたしたちの罪を許すために流された

「すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、彼らは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである。」(ローマ 3:23, 24)

わたしたちは、毎瞬間イエスを必要としている。わたしたちの心からこのお方の愛を失うことは多くのことを意味する。けれども、このお方はご自身「わたしにはあなたに対して責むべきことがある。あなたははじめの愛から離れてしまった」と仰せになる。……

多くの人の宗教はつらら一凍るような冷たさである。心が溶かされず、征服されていない人は少なくない。彼らは他の人々の心にふれることができない。なぜなら彼ら自身の心がキリストの心から流れ出る祝福された愛で充電されていないからである。……

本物の宗教は聖書を信じることに基づいている。神の御言は疑念なく、信じるべきである。聖書のどの部分であってももしかるべき理論に合わせるために切ったり、曲げたりすべきではない。人は神の御言に対して裁きの座につくことによって、人間の知恵を高めるべきではない。聖書は昔の聖なる人々が聖霊に動かされたとき、彼らによって書かれた。そして、この書には、わたしたちがパウロのように第三の天にまで連れて行かれるのでない限り、確実に知るすべてのこと、また神とキリストに関してわたしたちが学ぶことを望み得るすべてのことを含んでいる。使徒へのこの啓示が、彼のへりくだりを損なうことはなかった。

クリスチャンの生涯は、神の御言に書かれてあるとおりに統制される生涯である。旧約と新約聖書のすべての真理は、完全な全体を形づくっている。わ

たしたちはこれらの真理を大切に、信じ、従うべきである。真の弟子にとって、神のみ言葉を信じる信仰は生きた活動する原則である。なぜなら、「人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである」(ローマ 10:10)。信仰によって人は自分がキリストの義を受けることを信じるのである。

信仰、それ自体は、思いの行為である。イエスご自身がわたしたちの信仰の創始者であり完成者であられる。このお方はわたしたちのためにその命を与えてくださった。このお方の血はわたしたちのために、神にカインは殺人者であると叫んだアベルの血よりもすぐれたことを語る。キリストの血はわたしたちの罪を赦すために流された。

多くの者が義認と聖化の細かい点における区別を綿密に定義づけようとする間違いをおかす。彼らはこの二つの言葉の定義の中にしばしば彼ら自身の考えや推測をもちこむ。なぜ信仰による義というきわめて重大な問題に対して霊感よりもっと綿密であろうとするのであろうか。(原稿 21, 1891 年)

愛によって働き魂を清める信仰を日々時々刻々と働かせることによってキリストと結合している者は、自分の罪の許しを受け、聖化されて永遠の命へ至る。(原稿 12, 1901 年)

3月5日

義認された魂は光の中を歩む

「神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。……それは、今の時に、神の義を示すためであった。こうして、神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる者を義とされるのである。」(ローマ 3:25, 26)

「彼らは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである。神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、それは、今の時に、神の義を示すためであった。こうして、神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる者を義とされるのである」と使徒パウロは言う。

ここに真理が明白な言葉で表わされている。この憐れみと慈しみはまったく受けるに価しないものに与えられる。キリストの恵みは、罪人をおしみなく、彼の側の功績や権利なしに彼を義と認めるのである。義認とは十分で完全な罪の許しである。罪人が信仰によってキリストを受け入れる瞬間、まさにその瞬間に彼は赦される。キリストの義が彼に着せられ、彼はもはや神の許しの恵みを疑わないのである。

信仰には、それをわたしたちの救い主とするようなものは何もない。信仰はわたしたちの罪を取り除くことはできない。キリストは信じるすべての人を救いに至らせる神の力である。義認はイエス・キリストの功績を通してもたらされる。このお方は罪人の贖いのために代価を払ってくださった。けれども、イエスが信じる者を義とすることができるのは、このお方の血を信じる信仰を通してのみである。

罪人は義認の手段として自分自身の良い行いに頼ることはできない。彼は

自分の罪をすべて捨てる点にまで至り、光が自分の道を照らすとき、一つずつ光線を次々と大切にしていかなければならない。彼は信仰によって単純にキリストの血のうちになされた無償かつ十分な備えをつかむ。彼はキリストを通して自分に聖化と義認と贖いになられたという神のみ約束を信じる。

そして、もし彼がイエスに従うなら、彼は光の中をへりくだって歩み、光のうちに喜び、また他の人々にその光を発散する。信仰によって義とされた者として、彼は自分の全生涯の従順において快活さを携えている。神との平和は、キリストが彼にとってどういうお方であるかの結果である。神に従属し、このお方に誉を帰し、そのみ言葉を行う魂は、神聖な啓発を受ける。神の尊い御言のうちには、神に助けていただかないかぎり、人間の最高の力でも到達できない麗しさがああり、また純潔と気高さがある。……

わたしたちのうちだれ一人として、どのようなかたちの試練の下でも、神をつかむ手をゆるめる言い訳とはならない。人の同情は失望させるかもしれないが、神は愛し、哀れみ、ご自分の助けのみ手を伸ばしてくださる。神のとしえのみ腕は、助けを求めてご自分に向く魂をいだいてくださる。……神はご自分の子らをご自分に求め、自分自身でできないことをしていただくよう神により頼むことを喜ばれる。(サインズ・オブ・タイムズ 1898年3月19日)

3月6日

行いのない信仰は死んだものである

「わたしたちの父祖アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげた時、行いによって義とされたのではなかったか。あなたが知っているとおり、彼においては、信仰が行いと共に働き、その行いによって信仰が全うされ」（ヤコブ 2:21, 22）

わたしたちはもっとイエスを、そしてはるかに少なく自分を得ている必要がある。わたしたちには幼子のような単純さ、すなわち主に自分の必要をすべて申し上げ、このお方はその富の慈しみと愛に従ってわたしたちの必要を満たしてくださると信じるように導く単純さを必要としている。「わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう」と主は言われる。もしあなたがわたしを愛するなら、あなたはわたしの戒めを守ることによってその愛を示すのである。「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である」。

.....

「わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう」。これが品性の唯一真の試金石である。わたしたちは神のみ旨を行うことによって、神と神がつかわされたイエス・キリストを愛するという最高の証拠を与えるのである。神への愛をたびたび繰り返して述べる言葉は、その愛が実生活に表わされていない限り価値がない。神への愛は単なる言葉ではない。それは、生きて働く力である。天におられる御父のみ旨を行う者は、世に対して自分が神を愛していることを示す。彼の愛の実は良いわざのうちに見られる。……

使徒ヤコブは信仰による義の主題を提示する際に危険が生じることをさとり、真の信仰は相応の働きなくして存在することはできないことを示そうと労

した。アブラハムの経験が提示された。「あなたが知っているとおりに、彼においては、信仰が行いと共に働き、その行いによって信仰が全うされ」と彼は言う。この本物の信仰は、信者の内で本物の働きをする。信仰と従順は、堅固で価値のある経験をもたらす。

救う信仰ではない信念がある。悪魔も信じておののいていると御言は宣言している。愛によって働き魂を清めないいわゆる信仰は、だれも義としない。「これでわかるように、人が義とされるのは、行いによるのであって、信仰だけによるのではない」と使徒は言う。アブラハムは神を信じた。彼が信じたことはどのようにわかるであろうか。彼の働きが彼の信仰の性質を証した。そして、彼の信仰は義と認められたのである。

今日、わたしたちはアブラハムの信仰を必要としている。それは、自分たちの周りにたちこめ、神の愛という快い日光を締め出し、霊的な成長を妨げている暗闇を明るくする。わたしたちの信仰は、豊かに良い行いの実を結ぶべきである。なぜなら、働きのない信仰は死んだものだからである。果たされる一つ一つの義務、イエスのみ名によって払われる一つ一つの犠牲は、はなはだしく大きな報いをもたらす。神は、義務の行為そのものにおいて語られ、祝福をお与えになる。(サインズ・オブ・タイムズ 1898年3月19日)

3月7日

聖化は命のある限り続く

「実に、きよめるかたも、きよめられる者たちも、皆ひとりのかたから出ている。それゆえに主は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない。」(ヘブル 2:11)

悔い改めとへりくだった信頼をもって、自分の罪が刺し通し、自分の悲しみが重荷を負わせている主イエスを冥想する間に、わたしたちはこのお方のみ足の跡を歩むことを学ぶことができる。このお方を眺めることによって、その聖なるみすがたに変えられていく。そして、この働きがわたしたちのうちになされるとき、わたしたちは自分自身の義を主張せず、イエス・キリストを高め、自分の無力な魂はこの方の功績により頼むのである。

わたしたちの救い主は自己義を絶えずお責めになった。このお方は弟子たちに、最高の種類の宗教とは、それ自体、静かで控えめな方法で現れるものだとお教えになった。このお方は彼らの愛の行為を、見せびらかしや人から称賛や誉れを受けるためにではなく、神の栄光のために、報いは未来に期待して、静かに行なうよう警告なされた。もし彼らが人々にほめそやされるために良い行いをするなら、天におられる彼らの御父によって報いが与えられることはない。

キリストに従う者は人に聞かれる目的のために祈るべきではないと教えられた。「あなたは祈るとき、自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においてになるあなたの父に祈りなさい。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう」(マタイ 6:6)。キリストの唇から出たこのような表現は、パリサイ人の間で非常に広く行なわれているその種の敬神を是認してはおられないことを示している。山上でのこのお方の教えは、慈善行為や宗教礼拝の行為は、気取らない方法で悔い改めとへりくだりをもって行われるとき、気高い装いをおび、最も尊い香りを放つことを示している。純潔な動機

は行為を聖化する。

真の聖化とは神のご意志への完全な調和である。反逆的な思考や感情は克服され、イエスのみ声が新しい命を目覚めさせ、それは存在全体にゆきわたる。真に聖化されている者は自分自身の意見を善悪の基準として打ち立てることはしない。……神の聖化は生涯の間続く日ごとの働きである。日ごとに誘惑と闘い、自分自身の罪深い傾向を克服し、心と生活の聖潔を求めている者は、聖潔を自慢げに主張しない。彼らは義に飢え渴いており、彼らにとって罪は非常に罪深いものに見える。……

まことに義なる者、心から神を愛し畏れる者は、繁栄のときも逆境のときも同様にキリストの義の衣を着ている。(清められた生涯 8～11)

3月8日

聖化は一生の従順の結果

「『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである。」
(ヨハネ第一 2:6)

ヨハネは聖潔の教師であった。そして教会へ宛てた手紙の中で、クリスチャンの行いについてまちがうことのない原則を書き記した。「彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする」と、彼は書いた。……(ヨハネ第一 3:3)。クリスチャンは心と生活がきよくなければならないと、ヨハネは教えた。口先だけのむなしい言葉に満足してはならない。神が天において神聖であられるように、墮落した人間はキリストに対する信仰によって、そのいるところできよくなければならない。……

教会のきよめは、神の民に対して神がなされるすべてのわざの目的である。神は彼らがきよくなるように、永遠の昔から彼らを選んでおられた。神は彼らのためにみ子のいのちを犠牲にされた。それは彼らが真理に従順に従うことによってきよめられ、自己の偏狭さをすべて脱ぎ捨てるためである。神は彼らに個人的な働き、個人的屈服を要求される。彼らが神のかたちに似たものとされ、み霊によって支配されるときはじめて、神は信仰を告白する者たちによってあがめられることができる。そして後、救い主の証人として彼らは、彼らのためになされた神の恵みを知らせることができる。

真のきよめは愛の原則から出た働きによってあらわれる。「神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます」(ヨハネ第一 4:16)。キリストが心に住む人の生活は、敬神の心を行いにあらわすであろう。品性はきよめられ、高められ、気高くされ、あがめられるであろう。純粋な教えは正義の働きとよく混じり合い、天来の教えは聖なる実践と調和するのである。……

神に対するわれわれの愛を示すものは、同胞に対するわれわれの愛のかお

りである。魂に休息をもたらすのは、奉仕における忍耐である。謙遜に、勤勉に、忠実に働いてこそ、イスラエルの幸福は増し加えられる。神はキリストの道に自発的に従いたいと思う者を支え、強めて下さるのである。

聖化は、一瞬、一時間、一日だけの働きではなく、一生の働きである。それは感情の幸福な高揚によって得られるのではなく、絶えず罪に死に、絶えずキリストのために生きることの結果である。弱々しい、時たまの努力では、間違いを直すことも、品性を改善することもできない。長い、忍耐強い努力と、苦しい訓練と、断固たる戦いによってのみ、われわれは勝利することができる。われわれは次の日の戦いがどんなにきびしいものになるかを知らない。サタンが支配しているかぎり、われわれは自我を静めて、絶えずつきまとう罪にうち勝たねばならない。生きていくかぎり、留まる場所もなければ、完全にやり遂げたとと言えるところもない。聖化は生涯の服従から生じるものである。(患難から栄光へ下巻 262～264)

3月9日

「イエスの信仰」にもっと注意を

「確かに偉大なのは、この信心の奥義である、『神は肉において現れ、霊において義とせられ、御使たちに見られ、諸国民の間に伝えられ、世界の中で信じられ、栄光のうちに天に上げられた。』」(テモテ第一 3:16 英語訳)

多くの人々は、何が信仰を構成しているのかについて無知であるように見える。多くの人が暗闇と失望をつぶやく。わたしは尋ねた、あなたの顔はイエスに向いているであろうか。あなたは義の太陽であられるこのお方をながめているであろうか。あなたは信仰の問題とキリストの義に対する完全な依存を、諸教会にはっきりと明示する必要がある。……キリストについて、このお方のたぐいまれな愛と、わたしたちのためになされたキリストの大いなる犠牲についてあまりにもわずかしか考えてこなかったために、サタンはわたしたちがイエス・キリストについて持つべき、かつ持たなければならない見解をほとんど覆い隠してしまった。わたしたちは霊的な助けを求めて人間により頼むことを減じ、もっと、はるかにもっと、わたしたちの贖い主としてイエス・キリストに近づかなければならない。

わたしたちは確固たる目的をもってイエス・キリストの天来の属性を考えることができる。このお方の愛を語り、その憐れみを伝えては歌い、このお方を自分の個人的な救い主とすることができる。そのときわたしたちはキリストと一つである。わたしたちはキリストが愛されたことを愛し、キリストが憎まれたもの、すなわち罪を憎む。これらの事柄を語り、考えなければならない。……

わたしたちは罪を許してくださる救い主をつねに思いの前に保つべきである。しかしこのお方をその真の立場—神の律法を大いなるものとし、誉れあるものとしながら、しかも十字架にかかりよみがえられた救い主の血の功績にまったくより頼んでいる罪人を義とするために死ぬため来られたこと—を提示す

べきである。……

魂を救うメッセージ、第三天使のメッセージは世界に与えられるべきメッセージである。神の戒めとイエスの信仰はどちらも重要であり、はなはだ重要であるので、同じ強さと力をもって伝えられなければならない。メッセージの最初の部分が主要にあつかわれ、最後の部分は不用意にあつかわれてきた。イエスの信仰が理解されていない。わたしたちはそれを語り、それを生き、それを折り、そして民が家庭生活にメッセージのこの部分を持ち込むよう教育しなければならない。……

なぜ、わたしたちの唇は世に対してキリストの義とこのお方の愛という主題に沈黙するのであろうか。なぜ、わたしたちは人々を新しい命へとよみがえらせ、活気づけるものを彼らに伝えないのであろうか。使徒パウロは次のように宣言するとき、歓喜と崇敬に満たされていた。「確かに偉大なのは、この信心の奥義である、神は肉において現れ、霊において義とせられ、御使たちに見られ、諸国民の間に伝えられ、世界の中で信じられ、栄光のうちに天に上げられた」。……

キリストの品性は無限に完全な品性であり、このお方は掲げられなければならない。はっきりと見えるように掲げなければならない。なぜならキリストは、このお方を信じるすべての者の力であり、強さであり、聖化であり、また義だからである。(原稿 27, 1889 年)

3月10日

テストの時は、 信仰と愛を明らかにする

「しかし、神のゆるがない土台はすえられていて、それに次の句が証印として、
しるされている。『主は自分の者たちを知る。』」（テモテ第二 2:19）

自己否定、自己犠牲、慈愛、親切、愛、忍耐、不屈の精神、クリスチャンの信頼は、神と真につながっている者が日々結ぶ実である。彼らの行為は世に公表されないかもしれないが、彼ら自ら日々悪と格闘し、誘惑と悪に対して尊い勝利を得ている。厳粛な誓いが新たにされ、熱心な祈りと絶えず目を覚ましていることによって得られる力を通してその誓いは守られる。

情熱的な熱中者は、これらの静かな働き人の苦闘を認識しない。しかし、心の秘密をご覧になるお方は、心低く柔和になされる一つ一つの努力に注目し、是認をもってご覧になる。品性における愛と信仰という純金が現れるにはテストの時が必要である。試練と困惑が教会を襲うそのとき、キリストに真に従う者のゆるがない熱心さと温かい愛情が発達するのである。……

心のへりくだっている者、日々自分の魂が永遠の岩なるお方に固定する大切さを感じている者は、試練の嵐のただ中で動かされずに立つ。なぜなら彼らは自分自身に信頼しているのではないからである。……

健康な人、すなわち生涯の天職に従事し、日々快活な精神と、血管をめぐる健康的な血流をもって自分の仕事に出ていく人は、人に会うたびにその注意を自分の身体の健康に向けたりはしない。健康と活力は彼の人生の自然な状態なので、自分が非常に豊かな恩恵を楽しんでいることにほとんど気がつかない。

真に義なる人も同様である。彼は自分の善や敬神に気がつかない。宗教の原則が彼の人生と日ごろの行いの源泉となっているので、彼にとっては、いち

じくの木がいちじくの実を結び、あるいはバラの木がバラの花をつけるのとまったく同じように、御霊の実を結ぶことが自然である。彼の性質は神と同胞への愛が吹きこまれて充満しているので、喜んでキリストのみ働きを行うのである。

彼の感化の範囲に入って来る者はみな、彼のクリスチャン生活の麗しさと香りに気づくが、彼自身は気づかない。なぜなら、それは彼の習慣と傾向に調和しているからである。彼は神の光を求めて祈り、光のうちを歩むことを愛する。自分の天父のみ旨を行なうことが彼の食物であり飲み物である。彼の命はキリストと共に神のうちに隠されている。(清められた生涯 11～13)

3月11日

聖化は全存在を包含する

「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全きよめて下さるように。また、あなたがたの霊と心とからだを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときまで、責められるところのない者にして下さるように。」(テサロニケ第一 5:23 英語訳)

聖書に示されている聖化とは、全存在—霊と魂と体—を含むものである。パウロは、神がテサロニケの人々の「霊と心とからだを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときまで、責められるところのない者にして下さるように」と祈った(テサロニケ第一 5:23 英語訳)。また、信者たちに、「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい」と彼は書いた(ローマ 12:1)。

昔のイスラエルの時代において、神に犠牲として献げられるものは、みな、注意深く調べられた。その動物にもし一つでも欠陥があれば、それは拒否された。なぜなら、神は、供え物は「傷のないもの」でなければならないと命じられたからである。そのように、キリスト者は、自分たちのからだを、「神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物として」ささげるように命じられている。

そうするためには、彼らのすべての能力を、なしうる最上の状態に保たなければならない。肉体的、または知的能力を弱める習慣はすべて、人間を創造主に奉仕するのにふさわしくない者にする。神は、われわれが、自分たちのささげうる最上のものより劣るものをささげるとき、喜ばれるであろうか。キリストは、「心をつくし……て、主なるあなたの神を愛せよ」と言われた。

心をつくして神を愛する者は、その生涯をもって最上の奉仕をすることを望み、神のみこころを行なう能力を増進させる法則に、心身のすべての能力を

調和させようと常に努力する。彼らは、食欲や情欲をほしいままにして、彼らの天の父にささげる供え物を弱めたり汚したりしないのである。

ペテロは、「たましいに戦いをいどむ肉の欲を避けなさい」と言っている（ペテロ第一 2:11）。すべての罪深い満足は、機能をまひさせ、知的靈的知覚力を鈍らせる。そして、神の言葉や聖霊も、心になんの印象も与えることができなくなるのである。パウロは、コリント人に次のように書いている。「肉と靈とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くならうではないか」（コリント第二 7:1）。そして彼は、「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実（信仰）、柔和」などみ霊の実に「自制」も加えている（ガラテヤ 5:22, 23）。

このような靈感の言葉があるにもかかわらず、利益や流行を追ってその能力を弱めている自称キリスト者たちが、なんと多いことであろう。また、暴食、飲酒、放蕩などによって、神のかたちである人性を墮落させているものが、なんと多いことであろう。……自分の体が聖霊の宮であるものは、有害な習慣の奴隷にはならない。彼の能力は、血の代価をもって彼を買い取られたキリストに属している。（各時代の争闘下巻 202～204）

3月12日

ダニエルは結果が何であろうと固く立つ

「時に王は……アシベナズに、イスラエルの人々の中から、王の血統の者と、貴族たる者数人とを、連れて来るように命じた。すなわち身に傷がなく、容姿が美しく、すべての知恵にさとく、知識があつて、思慮深く、王の宮に仕えるに足る若者を連れてこさせ……ようとした。」(ダニエル 1:3, 4)

預言者ダニエルは傑出した人物であつた。彼は、人が知恵の神と結合するときどのような者になることができるかの輝かしい模範であつた。この聖なる神の人の生涯の簡潔な記述は、後に試練と誘惑に耐えるようにと召されるべき人々の励ましのために記録されている。

イスラエルの人々、彼らの王、貴族たち、祭司たちが捕虜として連れて行かれたとき、彼らの中で四人がバビロンの王の宮殿で仕えるために選ばれた。これらのうちの一人が後年発達した驚くべき能力の兆しを早いうちに見せていたダニエルであつた。これらの青年はみな貴族の出であり、「すなわち身に傷がなく、容姿が美しく、すべての知恵にさとく、知識があつて、思慮深く」と述べられている(ダニエル 1:4)。

これらの若々しい捕虜の優秀な才能に気づいて、ネブカデネザル王は自分の王国における重要な立場を占めさせるために彼らを準備させようと決心した。彼らは生涯の間宮廷で過ごすのに十分適した者となるために、東洋の習慣に従つて、カルデヤの言葉を学び、三年間、身体的及び知的訓練の周到な過程に服するのであつた。

この訓練学校で青年たちは王宮に入ることを許されるだけでなく、王の食卓から彼らが食すべき食事と飲むべきワインが用意されるのであつた。……

王の前におかれたご馳走の中にはモーセの律法で汚れたものと宣言されており、ヘブル人が食べることをはっきりと禁じられている豚肉や他の肉があつ

た。ここでダニエルは厳しいテストを受けることになった。彼は食事と飲み物に関して父祖の教えを堅持し、王の感情を害して、自分の立場だけでなく恐らくは命をも失うのであろうか。それとも主の戒めを無視して、王の恩寵を維持し、それによって大きな知的利点とこのうえなく世から誉めそやされる繁栄を確保するのであろうか。

ダニエルは長くためらわなかった。彼は自分の高潔さを守って固く立ち、結果は任せることを決心した。彼は「ダニエルは王の食物と、王の飲む酒とをもって、自分を汚すまいと、心に思い定めた」(同上 8)。……彼は神を自分の力とし、彼の人生のあらゆる取引において神への畏れがたえず彼の前にあった。(清められた生涯 18～20)

3月13日

ダニエルの生活は聖化を例証している

「そこでダニエルは宦官の長がダニエル、ハナニヤ、ミシャエルおよびアザリヤの上に立てた家令に言った、『どうぞ、しもべらを十日の間ためしてください。わたしたちにただ野菜を与えて食べさせ、水を飲ませ、』（ダニエル 1:11, 12)

ダニエルは自分の厳しく節制する習慣から離れるのもっともらしい言い訳を見つけることもできた。しかし神の是認は、もっとも権力のある地上の君主の好意よりも、一命そのものよりも一彼にとって大切であった。……

ダニエルはそのことを10日間試して決定するよう要請した。すなわち他の青年たちが王の美食にあずかっている間、ヘブルの青年たちはこの短期間に単純な食事が許されることを願った。……主はヘブルの青年たちの堅固さと自己否定を是認され、このお方の祝福が彼らに伴った。……

ダニエルの生涯は、何が聖化された品性を構成するかについての靈感を受けた事例である。それはすべての者、とくに若者に教訓を与える。神のご要求への厳格な遵守は、体と思いの健康に有益である。道徳的、知的偉業の最高水準に到達するためには、神からの知恵と力を求め、生活習慣のすべてにおいて厳格な節制を守ることが必要である。

わたしたちにはダニエルとその友達の経験の中に、食欲にふけるという誘惑に対する原則の勝利の実例がある。宗教上の原則を通して、青年たちはたとえ大きな犠牲を払ったとしても肉の欲に対して勝利し、神のご要求に忠実であり続けることができることを示している。

もしダニエルとその友達が異教の役人に妥協し、バビロン人の習慣どおり飲食することによって状況の重圧に屈していたら、どうであろうか。原則から一回逸脱することによって、彼らの善に対する感覚と悪に対する嫌悪感を弱めたことであろう。食欲の放縦は、身体の活力、知性の明晰さ、霊的な力を

犠牲にしたことであろう。一步誤ることによっておそらく次々と進み、ついには彼らの天とのつながりが断ち切られるに至り、彼らは誘惑によって一掃されてしまうことであろう。

神は「わたしを尊ぶ者を、わたしは尊ぶ」と仰せになった(サムエル上 2:30)。ダニエルが揺らぐことのない信頼をもって自分の神にすがりついている間、預言の力の霊が彼に臨んだ。彼は宮廷生活の義務に関して人から教えを受けたが、その一方、神から教えられて未来の奥義を読み、後の世代に象徴や比喩を通して、終わりの時代に実現する驚くべき事柄を示した。(清められた生涯 21～24)

3月14日

無限のお方のみ前に

「王は答えて言った、『しかし、わたしの見るのに四人の者がなわめなしに、火の中を歩いているが、なんの害をも受けていない。その第四の者の様子は神の子のようだ。』」(ダニエル 3:25)

火の燃える焔は平常の7倍あつくなっていた。そしてその中にヘブルの捕虜たちは投げ込まれた。炎がすさまじかったので、彼らを投げ入れた人々は焼き殺された。

突然王の表情が恐怖で青ざめた。彼の目は燃え上がる炎をじっと見つめ、大臣たちを振り返って言った、「われわれはあの三人を縛って、火の中に投げ入れたではないか」(ダニエル 3:4)。答えは「王よ、その通りです」であった。そして今専制君主は「見よ、四人の者がなわめなしに、火の中を歩いているが、なんの害をも受けていない。その第四の者の様子は神の子のようだ」と叫んだ(同上 25)。

キリストがご自身を人の子らに現されるとき、目には見えない力が彼らの魂に語りかける。彼らは自分が無限のお方のみ前にいることを感じる。このお方の大権の前に、王も貴族も震え、生ける神があらゆる地上の権力にまさることを認める。

良心のとがめと恥ずかしさで王は、「いと高き神のしもべよ、出てきなさい」と叫んだ(同上 26)。そこで彼らは従って、その身に何の害も受けず、その衣服に火のにおいもつけずに大群衆の前に現われた。この奇跡は人々の思いにめざましい変化を生じさせた。あれほど仰々しく立てられた巨大な金の像は忘れられた。王は、だれでもこれらの人々の神に敵して語る者は死刑に処せられるとの命令を布告した、なぜなら「このように救を施すことのできる神は、ほかにはないからだ」(同上 29)。

この三人のヘブル人は本物の聖化を有していた。真のクリスチャンの原則は、結果を考察するために立ち止まらない。もしわたしがこれをするなら、人々はわたしのことをどう思うであろうか、あるいはもしわたしがあれをするなら、わたしの世的な繁栄にどう影響するであろうかなどと問わない。神の子らは、この上なく熱烈に切望して、自分たちのわざがこのお方に栄光を帰すことができるように、神は彼らに何をおさせになりたいかを知ろうと願うのである。主は、ご自分に従うすべての者の心と生活が神の恵みによって支配され、世において燃えて輝く光となるように十分な備えをして下さった。

これらの忠実なヘブル人には大いなる生来の能力があった。彼らは最高の知的教養を享受し、今や名誉ある立場を占めていた。しかし、これらすべてのことによって彼らが神を忘れることはなかった。彼らの力は神の恵みの聖化する感化力に服していた。彼らは自分たちの不動の高潔さによって、暗闇から驚くべきみ光に招き入れてくださったお方をほめ讃えたのであった。(清められた生涯 38～40)

3月15日

三人のヘブル人は神の力を表わす

「ネブカデネザルは言った、『シャデラク、メシャク、アベデネゴの神はほむべきかな。神はその使者をつかわして、自分に寄り頼むしもべらを救った。また彼らは自分の神以外の神に仕え、拜むよりも、むしろ王の命令を無視し、自分の身をも捨てようとしたのだ。』（ダニエル 3:28)

大群衆の前での彼らの驚くべき救出において、神の力と威光があらわされた。イエスは燃える炉の中で自ら彼らのそばに立ち、ご自身の臨在の栄光によってバビロンの高慢な王に、間違いなく神の御子であることを確信させた。ダニエルとその友達から天の光が輝き出て、彼らの同僚はみな、彼らの生活を高尚にし、彼らの品性を麗しくすることのできた信仰を理解した。主はご自分の忠実な僕を救出することによって、ご自分が圧迫されている者の側に立ち、天の神の権威を踏みにじる地上の権力をみな覆すと宣言なさる。

ここで神のみ事業において意気地のない者、躊躇する者、臆病な者に、なんという教訓が与えられていることであろうか！脅かしや危難によって、義務に顔をそむけない者になんという励ましが与えられていることであろうか！これらの忠実で堅固な人物は聖化を実証するが、高い名誉をわがものと主張する考えは毛頭ない。比較的目立たないが献身的なクリスチャンによって成し遂げられる善行の総計は、生涯の記録が知られるようになるまで、すなわち審判を行う者が席に着き数々の書き物が開かれるときまで測り知ることができない。

キリストはこの種類の人々とご自分を同一視なさる。このお方は彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない。神に非常に近く結びつき、その生活が神のみ旨にぴったりと調和しているために明るく輝く光となり、魂、体、精神において全体が聖化されている人が、今わたしたちの内に一人いるところに百人いるべきである。

光の子らと闇の子らの中で争闘は、なお続いている。キリストのみ名を名乗る者は、自分たちの努力を弱める無気力を払い落とし、自分たちに帰する重大な責任に応じるべきである。これを行なうすべての者は、自分たちのうちに神の力が現われることを期待できる。神の御子、世の贖い主が、彼らの言葉と行いの中に表わされ、神の御名があがめられる。(清められた生涯 40, 41)

シャデラク、メシャク、アベデネゴの時代のように、主は地上歴史の最後の時代において、正義のために固く立つ人々のために、大いなる働きをなさるのである。ヘブルの勇者たちと火の燃える炉の中を歩かれたかたは、どこであっても、主に従う人々とともにおられるのである。……神に選ばれた人々は揺らぐことなく立つのである。(国と指導者下巻 121)

3月16日

王はどのようにして神の御子を認めたか

「そこでネブカデネザルは、その火の燃える炉の入口に近寄って、『いと高き神のしもべシャデラク、メシャク、アベデネゴよ、出てきなさい』と言ったので、シャデラク、メシャク、アベデネゴはその火の中から出てきた。」(ダニエル 3:26)

異教の王はどのようにして、神の子の姿を知ることができたであろうか。バビロンにおいて信任の地位についたヘブルの捕虜たちは、その生活と品性において王の前に真理をあらわした。彼らはその信仰の理由を聞かれたときに、ためらわずにそれを伝えた。彼らは簡単明瞭に義の原則を示し、彼らの周りの人々に彼らの礼拝する神のことを教えた。彼らは来たるべき贖い主キリストのことを語った。であるから王は、火の中の第四番目の姿に神のみ子を認めたのであった。……

そこでシャデラク、メシャク、アベデネゴは、大群衆の前で、その身に何の害も受けずに現れた。彼らの救い主の臨在が彼らを害から守り、ただ彼らを縛っていたものが焼けただけであった。「総督、長官、知事および王の大臣たちも集まってきて、この人々を見たが、火は彼らの身にはなんの力もなく、その頭の毛は焼けず、その外套はそこなわれず、火のにおいもこれに付かなかった」(ダニエル 3:27)。……

ネブカデネザルはその日にこういうことが起こったので、命令を発した。「諸民、諸族、諸国語の者のうちだれでも、シャデラク、メシャク、アベデネゴの神をののしる者があるならば、その身は切り裂かれ、その家は滅ぼされなければならない。」王が、このような命令を出した理由は、「このように救を施すことのできる神は、ほかにないからだ」と力説した(ダニエル 3:29)。

バビロンの王は、これとまたこれに類した言葉によって、ヘブルびとの神の

力と権威とは、最高の崇敬に値することを、地のすべての民族の前で広く行きわたらせようと努めた。そして神は、王が神を崇め、神に対する忠誠の告白をバビロン全国に行きわたらせようとする努力を、お喜びになった。

王が公の告白をし、他のすべての神々にまさって天の神を崇めようとしたことは、正しかった。しかし国民に同様の信仰の告白と、同様の敬神深さを示すように強制したことは、ネブカデネザルの地上の王としての権威を越えたことであつた。王は金の像を拝むことを拒否するすべての者を、火で焼く命令を出す権威がないと同様に、政治的であれ道徳的なことであれ、神を礼拝しない者を殺すと脅かす権威はないのである。神は人間に服従を強制されることはない。神はすべての人々が自由に、何に仕えるかを選ばせておられる。(国と指導者下巻 117～120)

3月17日

神はダニエルの熱心な祈りに お応えになる

「『大いに愛せられる人ダニエルよ、……わたしは今あなたのもとにつかわされたのです。……あなたが悟ろうと心をこめ……たその初めの日から、あなたの言葉は、すでに聞かれたので、わたしは、あなたの言葉のゆえにきたのです。』(ダニエル 10:11, 12)

「この幻を見た者は、われダニエルのみであって、……力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」(ダニエル 10:7, 8)。……真に聖化された者はみな同じような経験をする。キリストの偉大さ、栄光、完全をはっきりと見ればみるほど、彼らは自分の弱さと不完全さを見る。彼らには罪のない品性を主張しようとする意向はない。それ自体正しく魅力的に見えたものは、キリストの純潔と栄光に対比して、ただ価値なく、朽ちるものにはしか見えなくなる。人が「わたしには罪がない、わたしは聖化されている」と言うのは、彼らが神から離れているとき、キリストをあまりにもおぼろげにしか見るこのできないときである。

ガブリエルが今預言者に現れて、次のように彼に話しかけた、「大いに愛せられる人ダニエルよ、わたしがあなたに告げる言葉に心を留め、立ちあがりなさい(理解しなさい)」(ダニエル 10:11)。……天の至高者からなんという大きな名誉がダニエルに示されたことか!このお方はご自分の震えている僕を励まし、彼の祈りが天で聞かれていることを彼に保証した。その熱心な嘆願に応じて天使ガブリエルがペルシャ王の心に影響を及ぼすために送られたのである。ペルシャの王はダニエルが断食と祈りをしていた3週間、神の御霊の感化力に抵抗していたが、天の君、大天使、ミカエルが、ダニエルの祈りに応えて、決定的な行動を起こすよう頑固な王の心を翻すために遣わされた。

「彼がこれらの言葉を、わたしに述べていたとき、わたしは、地にひれ伏して黙っていたが、見よ、人の子のような者が、わたしのくちびるにさわった。……そして言った、『大いに愛せられる人よ、恐れるには及ばない。安心なさい。心を強くし、勇気を出しなさい』。彼がこう言ったとき、わたしは力づいて言った、『わが主よ、語ってください。あなたは、わたしに力をつけてくださったから』」（ダニエル 10:15～19）。

ダニエルにあらわされた神の栄光があまりにも大いなるものであったため、彼はこの光景に耐えることができなかった。そのとき天の使者はご自分の臨在の輝きを覆い、預言者に「人の子のような者」としてあらわれた（ダニエル 10:16）。彼の神聖な力によって、この高潔と信仰の人を強め、神から彼に送られたメッセージを聞くことができるようにした。

ダニエルはいと高き者に献身した僕であった。彼の長い生涯は自分の主人のための気高い奉仕の行為に満ちていた。彼の品性の高潔さと揺らぐことのない忠実さは、ただ彼の心のへりくだりと神の御前の悔悟による結果であった。繰り返すが、ダニエルの生涯は真の聖化の靈感を受けた実例である。（清められた生涯 50～52）

3月18日

真に聖化された者は 無価値であることを感じる

「われわれがあなたの前に祈をささげるのは、われわれの義によるのではなく、ただあなたの大きいなるあわれみによるのです。」(ダニエル 9:18)

聖書のいう聖化を経験する者は、謙遜の精神をあらわす。彼らは、モーセのように、聖なるおかたのおそるべき威光をながめ、無限のおかたの純潔と崇高な完全さと比べて自分たちの無価値なことを認めるのである。

預言者ダニエルは、真の聖化の実例である。彼の長い一生は、主のための気高い奉仕に満ちていた。彼は、神に「大いに愛せられる人」であった(ダニエル書 10:11)。この榮譽にあずかった預言者は、しかし自分の純潔と清さを主張しないで、自分を真に罪深いイスラエルのひとりとみなし、自国民のために神の前で懇願した。「われわれがあなたの前に祈をささげるのは、われわれの義によるのではなく、ただあなたの大きいなるあわれみによるのです。」「われわれは罪を犯し、よこしまなふるまいをしました。」(ダニエル書 9:18, 15)。

……

ヨブは、つむじ風の中から主の声を聞いたときに、「それでわたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います」と叫んだ(ヨブ記 42:6)。イザヤは、主の栄光を見、ケルビムが「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主」と呼ばわるのを聞いて、「わざわいなるかな、わたしは滅びるばかりだ」と叫んだ(イザヤ書 6:3, 5)。パウロは、第三の天にまで引き上げられ、人間には語ることでできない言葉を聞いた後、自分のことを、「聖徒たちのうちで最も小さい者である」と言っている(コリント第二 12:2 - 4 参照。エペソ 3:8)。……

カルバリーの十字架の影を歩くものには、自分を高めたり、自分はもはや罪を犯さないなどと誇ったりすることはあり得ない。彼らは、自分たちの罪が、

神のみ子の心臓を破裂させるほどの苦悩を引き起こしたことを感じる。そしてこの思いが、彼らをへりくだらせる。イエスに最も近く生活する者が、人間の弱さと罪深さを最もはっきりと認める。そして自分たちの唯一の希望を、十字架につけられ復活された救い主の功績に置くのである。

現在、宗教界において注目を集めている聖化には、自己賞揚の精神と神の律法の無視とが伴っており、このことは、それが聖書の宗教とは異なったものであることを示している。その主唱者たちは、聖化は瞬間的な業で、信仰だけによって、完全な聖化に到達すると教えるのである。彼らは、「ただ信じなさい。そうすれば、祝福が与えられる」と言う。……それとともに、彼らは、神の律法の権威を拒否し、自分たちは戒めを守る義務から解放されたと主張する。しかし、神の性質とみ旨の表現であり、何が神のみこころにかなうかを示している原則に調和せずして、人間は、神のみこころと品性とに一致して聖なるものとなることができるであろうか。(各時代の犬争闘下巻 198～200)

3月19日

愛は悔い改めた罪人の愛であった

「愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は、神から出たものなのである。すべて愛する者は、神から生れた者であって、神を知っている。」(ヨハネ第一 4:7)

使徒ヨハネは、他の兄弟たちにまさって「イエスに愛された弟子」として際立っていた。ほんのわずかといえども品性において臆病だったり、弱かったり、揺れ動いたりするものはなかったが、彼には親しみやすい気質があり、温かく愛する心を持っていた。彼は顕著な意味においてキリストとの友情を楽しんだかのように見える。そして彼は救い主の信頼と愛情のしるしを多く受けた。彼は変貌の山でのキリストの栄光とゲッセマネでの苦悩を目撃することを許された三人のうちの一人であり、主は十字架上の最後の苦悩の時に、ご自分の母親をヨハネの世話に託された。

愛された弟子に対する救い主の愛情は、力を尽くした熱烈な献身によって報いられた。ヨハネはぶどうが堂々とした柱にからみついて離れないように、キリストにからみついて離れなかった。自分の主人のために、彼はあえて法廷の危険を冒し、十字架の周りにとどまっていた。そしてキリストがよみがえられたとの知らせに、彼は墓へ急ぎ、熱心さのゆえに、性急なペテロより先に着いた。

自分の主人に対するヨハネの愛は、単なる人間の友情ではなく、悔い改めた罪人の愛であった。彼は自分がキリストの尊い血潮によって贖われたことを感じた。彼は自分の主の奉仕において働き、苦しむことを最高の誉れと考えた。イエスに対する彼の愛は、キリストがそのために死なれたすべての人を愛するように導いた。彼の宗教は実際的な性質のものであった。彼は神への愛は、その子らへの愛のうちに表わされるものだと結論づけた。「わたしたちが彼を愛するのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである。『神を愛している』

と言いながら兄弟を憎む者は、偽り者である。現に見ている兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできない」(ヨハネ第一 4:19, 20 英語訳)。使徒の生涯は、その教えに調和していた。

彼の心のうちに明々と燃えていたキリストを思う愛は、自分の同胞のために、特別にキリスト教会のうちにいる自分の兄弟のために、もっとも熱心で倦むことをしらない働きへと彼を導いた。……

ヨハネはイエスに似た者になりたいと願った。そして変化させるキリストの愛の感化力の下で、彼は柔和で心のへりくだった者となった。自己はイエスのうちに隠された。彼は生けるぶどうの木と密接に結合し、こうして神性にあずかる者となった。キリストと交わる結果はいつも同じである。これが真の聖化である。(清められた生涯 53～55)

3月20日

ヨハネはキリストのお教えになる 教訓をよく学んだ

「人の子は、人の命を滅ぼすためではなく、それらを救うために来たからである。」(ルカ 9:56 英語訳)

あるとき、キリストはご自分の前にサマリヤの村に使者を送って、人々にご自身と弟子たちが休息する用意をお求めになった。しかし、救い主が町に近づくと、エルサレムへ向かう途中のようであられた。これがサマリヤ人たちの敵意を呼び覚ました。そして、このお方を招き、むしろ彼らをしいて引きとめるために使者を送る代わりに、彼らは普通の旅行者にならあらわしたはずの礼儀をあらわさなかった。イエスは決して、だれに対してもご自分のご臨在をおしつけることはなさらない。そのために、サマリヤ人たちは、もし彼らがこのお方に客人として来て下さるよう懇願していたならば与えられたはずの祝福を失った。

わたしたちはこの天の大君に対する失礼な取り扱いをいぶかる。しかし、キリストに従うものだと公言するわたしたちは、なんとしばしば同じような怠慢の罪を犯していることであろう。わたしたちはイエスに自分たちの心と家庭に宿ってくださるように強いて願うであろうか。このお方は愛と恵みと祝福に満ち、これらの賜物をわたしたちに与えようとして立っておられる。しかし、サマリヤ人のように、しばしばそれなしに満足しているのである。

弟子たちは、キリストがご自分のご臨在によってサマリヤ人たちを祝福しようとしておられる目的に気づいていた。そのため、自分たちの主人に対して表わされた冷たさ、嫉妬、不敬を見たとき、彼らは驚きと憤りに満たされた。ヤコブとヨハネは特にわきたった。彼らはこれほど敬っているお方が、このように取り扱われることは、彼らにとっては、直ちに罰することなく見過ごしにする

このできないほど大きな犯罪であるかのように思えた。彼らは熱くなって言った、「主よ、いかがでしょう。(エリヤがしたように) 彼らを焼き払ってしまうように、天から火をよび求めましょうか」(ルカ 9:54)。……

イエスはご自分の弟子たちを譴責して、「あなたがたは自分がどのような精神を持っているのか知らないのである。なぜなら人の子は、人の命を滅ぼすためではなく、それらを救うために来たからである」と言われた(55, 56 英語訳)。ヨハネと弟子仲間たちは、キリストが教師であられる学校に入学していた。いつでも自分自身の欠点を認め、品性において向上したいと切望している人々には、豊かな機会があった。ヨハネは一つ一つの教訓を心に蓄え、つねに自分の命を神聖な型に調和したものにしようとする努力をしていた。

柔和、へりくだり、愛が、恵みにおける成長とこのお方の働きにふさわしい者となるために重要不可欠なものとして示されていたイエスの教訓は、ヨハネにとって最高の価値があった。これらの教訓は、キリストの初期の弟子たちと同様に、個人としてまた教会の兄弟としてわたしたちに述べられている。(清められた生涯 57-59)

3月21日

対照的なヨハネとユダ

「御子を持つ者はいのちを持ち、神の御子を持たない者はいのちを持っていない。」(ヨハネ第一 5:12)

キリストと親密に交わった数年間に、ヨハネはしばしば救い主から戒めと注意を受けた。そして彼はこうした叱責を受け入れた。聖なるかたのご品性が現されたとき、彼は自分の欠点を認め、その啓示によって謙遜にされた。毎日彼は自分の激しい気性とくらべて、イエスの柔和と寛容を見、謙遜と忍耐の教訓を聞いた。毎日彼の心はキリストに引きつけられ、ついには主に対する愛によって自己がかき消されていった。ヨハネが神のみ子の日常生活の中に力とやさしさ、威厳と柔和、強さと忍耐を見たとき、彼の心はただ、感嘆するばかりであった。彼は自分の憤慨しやすい、野心的な性質をキリストの形成する力にゆだねたので、天来の愛が彼のうちに働いて、品性を一変させたのである。

ヨハネの生涯において達成されたきよめと著しい対照を示して、仲間の弟子ユダの経験がある。同僚と同じく、ユダもキリストの弟子であると告白していたが、彼の敬神はほんの形だけのものだった。ユダはキリストのご品性の美しさを感じないわけではなかった。そしてしばしば救い主のことばを聞いているとき、彼に確信がもたらされたのだが、彼は謙遜な心になり、罪を告白しようとしなかった。……

ヨハネは自分の欠点と真剣に戦ったが、ユダは良心を汚し、誘惑に負けて、悪の習慣を更にしかりと身につけてしまった。キリストが教えた真理を実行することは、彼の願望と目的に一致しなかった。そして、彼は天来の知恵を受けるために、自分の考えを明け渡す気になれなかった。ユダは光の中を歩くことをせず、闇の中を歩くことを選んだ。悪い願望、強欲、復讐心、暗く陰気な思いが彼の心をとらえ、ついにサタンに全く支配されるまでになった。

ヨハネとユダは、キリストの弟子だと告白した人たちを代表している。この二人の弟子は、同じようにキリストの模範を学び、それに従う機会を持っていた。……二人はそれぞれ性格に大きな欠点があったがまた、二人とも、性格を変える聖なる恵みに接することができた。しかし、一人が謙遜にイエスのことを学んでいる間に、もう一人はみことばを実行せずただ聞くだけであった。一人が日ごとに自己に死に、罪に勝利して、真理によってきよめられていたのに、他方は、恵みの変える力を拒み、利己的な願いにふけり、サタンのとりこにされた。……

人にはそれぞれ性格に目立つ欠点があるかもしれない。しかしその人が、キリストの真の弟子になると、神の恵みの力により変えられ、きよめられるのである。(患難から栄光へ下巻 260～262)

3月22日

神の愛に驚く

「ところが、わたしは、主の日に御霊に感じた。そして、わたしのうしろの方で、ラッパのような大きな声がするのを聞いた。」(黙示録 1:10)

ヨハネによって述べられている主の日は安息日、すなわちエホバが創造の偉大なみわざの後に休まれ、その日に休まれたがゆえに祝福し、聖とされた日である。ヨハネは人々の間で安息日について宣べ伝えていたときと同じように、パトモス島でそれを神聖に守った。彼を取り囲む不毛の岩々は、ヨハネに岩のようなホレブの山を、また神がご自分の律法を語られたとき、どのように「安息日を覚えて、これを聖とせよ」と仰せになったかを連想させた(出エジプト記 20:8)。

神の御子はモーセに山頂から語られた。神は岩々をご自分の聖所とされた。このお方の宮はとこしえの丘であった。神聖な立法者は岩山に下ってこられ、すべての人が聞いているところでご自分の律法を語られた。それは彼らが壮大にして恐るべきこのお方の力と栄光の現われによって強い印象を受け、神の戒めを犯すことを恐れるためであった。神はご自分の律法をかみなりといなづまの中で語られ、厚い雲が山頂にあった。そしてこのお方ははなはだ大きなラッパの音のようであった。エホバの律法は不変であり、このお方がその律法を記された板は固い岩であり、それはこのお方の規則の不変性を意味していた。岩山であるホレブは神の律法を愛し、尊ぶすべての人にとって神聖な場所となった。

ヨハネがホレブの光景を瞑想しているとき、第七日目を聖別されたお方の御霊が、彼に臨んだ。彼は神聖な律法を犯したアダムの子とその不法の恐るべき結果を考えていた。失われた人類を贖うためにご自分の御子をお与えになった神の無限の愛は、言葉で表現するには、あまりにも大きなものに思わ

れた。彼はそれを自分の手紙の中で提示し、教会と世にそれをながめるよう呼びかけている。「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜ったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである。世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである」(ヨハネ第一 3:1)

神が反逆の人類のためにご自分の御子を与えることがおできになったことはヨハネにとって神秘であった。そして彼は、天がこれほどの代価を払って立てられた救いの計画が、無限の犠牲を払ってもらった人々によって拒まれることに驚き、われを忘れた。……

神に対して罪を犯すこと、まがった人間の意志をその造り主のご意志に反対して固めることは軽い問題ではない。この世においてさえ、神の戒めに従うことは、人間の最上の利益のためである。そして神に服し、このお方との平安を得ることは、たしかに永遠の利益のためである。……神は従うか、従わないか、人を自由な道徳的存在者として造られた。永遠の命という報い—永遠の重い栄光—は、神のみ旨を行なう人々に約束されている。(清められた生涯 74～76)

3月23日

愛は心からの従順によって 示される

「もし、あなたがたが快く従うなら、地の良き物を食べることができる。」(イザヤ 1:19)

クリスチャンの品性は日常生活によって示される。キリストは、「すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ」と言われた(マタイ 7:17)。わたしたちの救い主は、ご自身をぶどうの木に、ご自分に従う人々をその枝にたとえられた。このお方ははっきりと、ご自分の弟子になりたい者はみな実を結ばなければならないことを宣言しておられる。それから、このお方は彼らがどのように実り豊かな枝になることができるかを示される。「わたしにつながってなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながってしよう。枝がぶどうの木につながってなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながってなければ実を結ぶことができない」(ヨハネ 15:4)。

使徒パウロはクリスチャンが結ぶべき実を描写している。彼はそれが「善意と正義と真実との実」であると述べている(エペソ 5:9)。そしてまた、「御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実(信仰)、柔和、自制である(ガラテヤ 5:22, 23)。これらの尊い恵みは生活において実行にうつされた神の律法の原則にすぎない。

神の律法こそ道徳的完全の唯一のまことの標準である。律法は実際的にキリストの生涯において例証された。このお方はご自分について、「わたしの父のいましめを守った」と言われる(ヨハネ 15:10)。この従順以下のものでは何ひとつ神のみ言葉のご要求にこたえることはできない。『「彼における」と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」(ヨハネ第一 2:6)。わた

私たちはそうすることはできないと言いつつすることはできない。なぜなら、わたしたちには次の保証があるからである「わたしの恵みはあなたに対して十分である」(コリント第二 12:9)。神聖な鏡、つまり神の律法をながめるとき、わたしたちは罪のはなはだしい罪深さと、違反者としての自分自身の失われた状態を見る。しかし、悔い改めと信仰によって、わたしたちは神のみ前に義とされ、神聖な恵みを通して神の戒めへの従順をお捧げすることができるようにされるのである。

神への本物の愛を持っている人々は、このお方のみ旨を知って行なおうとする熱烈な願いを表わす。……自分の親を愛する子供は、その愛を心からの従順によって示す。しかし、利己的で感謝の念をもたない子供は、自分の親のためにすることをできるだけ少なくしようとする。それでいながら同時にその子供は、従順で忠実な者たちへ与えられる特権をみな享受したいと願うのである。

同じ相違が神の子だと公言する人々の間に見られる。自分たちが神の愛と保護の対象であることを知っており、またこのお方の祝福を受けたいと望む多くの人々は、このお方のみ旨を行なうことに何の喜びもない。彼らは自分たちに対する神のご要求を不快な抑制だとみなし、このお方の戒めを悲しむべきくびきだと考える。しかし、真に心と命の聖潔を求めている人は神の律法を喜び、ただ自分がその要求にはるかに及ばないことを嘆くだけである。(清められた生涯 80, 81)

3月24日

信仰と従順によって聖化される

「あなたがたが実を豊かに結び、そしてわたしの弟子となるならば、それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう。」(ヨハネ 15:8)

多くの人々は、救い主が生きられたような生涯にしり込みする。彼らは型であるお方を模倣し、よいわざにおいて豊かな実を結び、それから、もっと豊かな実を結ぶことができるように忍耐強く神の剪定に耐えるにはあまりに大きな犠牲が必要だと感じる。しかし、クリスチャンが自らを単にキリストのみ手のうちにあるいやしい器にすぎないものとみなし、神が約束された助けにより頼みながら、毎日の義務を忠実に果たすために努力するとき、彼はキリストのくびきを負って、それが負いやすいものであることを見出す。そのとき、彼はキリストのために重荷を負い、それらを軽いと宣言する。彼は勇気と確信をもって見上げ、「わたしは自分の信じてきたかたを知っており、またそのかたは、わたしがゆだねたものを、かの日に至るまで守って下さることができると、確信しているからである」と言うことができるのである(テモテ第二 1:12 英語訳)。

もしわたしたちの行く手に障害があってもそれを忠実に克服するならば、もしわたしたちが反対や非難があっても、キリストのみ名のうちに勝利を得るならば、もしわたしたちが責任を負って、自分たちの主人の霊のうちに自分の義務を果たすならば、そのとき、本当にわたしたちはこのお方の忠実さと力について尊い知識を得る。もはや他の人の経験に頼ることはない。なぜなら、わたしたちは自分自身のうちに証を持っているからである。むかしのサマリア人のように、わたしたちは、「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。自分自身で親しく聞いて、この人こそまことに世の救主であることが、わかったからである」と言うことができる(ヨハネ 4:42)。

わたしたちがキリストのご品性を臆想すればするほど、そしてこのお方の救

いの力を経験すればするほど、わたしたちは自分自身の弱さと不完全さをますます鋭く自覚し、またますます熱心にこのお方を自分の力また自分の贖い主として見るようになる。……キリストを信じる信仰と神の律法への従順によってわたしたちは聖化されることができ、こうして栄光の王国における聖天使と白い衣の贖われた者たちの交わりにふさわしい者とされる。

キリストとの密接な結合を維持し、神の事柄において豊かな経験を持つことは、すべてのクリスチャンの特権であるばかりでなく、義務である。そのとき、彼の生涯はよいわざにおいて実り豊かになる。……

わたしたちが敬神にすぐれた人々の生涯を読むとき、しばしば彼らの経験と偉業は自分たちの手の届かないところにあると考える。しかし、そうではない。キリストはすべての人のために死なれた。そしてわたしたちはみ言葉の中で、このお方は地上の親が自分の子供たちに良い賜物を与えるのにまさって、求める者にご自分の聖霊を与えたいと望んでおられると保証されている。

預言者と使徒たちは奇跡によってクリスチャン品性を完成させたのではなかった。彼らは神が自分たちの手の届くところにおいてくださった手段を用いたのである。そして同じ努力をする者は、同じ結果を得るのである。(清められた生涯 82～84)

3月25日

パウロは聖化を強調する

「わたしたちがどういう教を主イエスによって与えたか、あなたがたはよく知っている。神のみこころは、あなたがたが清くなることである。すなわち、不品行を慎み、」(テサロニケ第一 4:2, 3)

エペソにある教会への手紙の中で、パウロは彼らの前に「福音の奥義」(エペソ 6:19)、「キリストの無尽蔵の富」(エペソ 3:8)を提示し、それから、彼らの霊的な繁栄のために彼が熱心に祈っていることを確認した。

「こういうわけで、わたしはひざをかがめて、天上にあり地上にあつて「父」と呼ばれているあらゆるものの源なる父に祈る。どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるよう、また、信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活することにより、すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされるように、と祈る。」(エペソ 3:14～19)。

彼はコリント人の兄弟たちにもまた書き記している。「キリスト・イエスにあつてきよめられ……たかたがたへ。……わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。わたしは、あなたがたがキリスト・イエスにあつて与えられた神の恵みを思つて、いつも神に感謝している。あなたがたはキリストにあつて、すべてのことに、すなわち、すべての言葉にもすべての知識にも恵まれ、キリストのためのあかしが、あなたがたのうちに確かなものとされ、こうして、あなたがたは恵みの賜物にいささかも欠けることがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れるのを待ち望んでいる」(コリント第一 1:2～7)。

これらの言葉はコリントにある教会だけに宛てられたのではなく、終わりの時代に至るすべての神の民へ宛てられたのである。すべてのクリスチャンは聖化の祝福を享受することができる。

使徒はこれらの言葉を続けている、「さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエスキリストの名によって、あなたがたに勧める。みな語ることを一つにして、お互いの間に分争がないようにし、同じ心、同じ思いになって、堅く結び合っていてほしい」(エペソ 3:10)。パウロは彼らに不可能なことを訴えたのではなかった。結合は、クリスチャンの完全のたしかな結果である。……

使徒自身、自分が兄弟たちの前においた同じ聖潔の標準に到達しようと努力していた。……パウロは、よい機会のあるごとに、聖書の聖化の重要性を強調することにためらわなかった。彼は、「わたしたちがどういう教(戒め)を主イエスによって与えたか、あなたがたはよく知っている。(なぜなら)神のみこころは、あなたがたが清くなること(だから)である」と述べている(テサロニケ第一 4:2, 3)。

「わたしの愛する者たちよ。そういうわけだから、あなたがたがいつも従順であつたように、わたしが一緒にいる時だけでなく、いない今は、いつそう従順でいて、恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい。……すべてのことを、つぶやかず疑わないでしなさい。それは、あなたがたが責められるところのない純真な者となり、曲った邪悪な時代のただ中であつて、傷のない神の子となるためである。あなたがたは、いのちの言葉を堅く持って、彼らの間で星のようにこの世に輝いている」(ピリピ 2:12～15)。(清められた生涯 84～87)

3月26日

信仰の目をもってイエスを眺める

「しかし感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜ったのである。」(コリント第一 15:57)

信仰によって、勝利するすべての人のためにおかれている冠を見なさい。贖われた者の高らかな歌声、すなわちほふられ、わたしたちを神へと贖われた小羊こそはふさわしい、ふさわしいとの歌を聞きなさい。これらの光景を現実と見なすように努力しなさい。

最初のクリスチャン殉教者であったステパノは、高いところにおける権威と主権者と霊的悪に対する彼の恐るべき戦いにおいて叫んだ、「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える」(使徒行伝 7:56)。世の救い主が、深い関心をもって天から彼をご覧になっているのが彼にあらわされた。そしてキリストのみ顔の栄光に輝く光がステパノの上に輝き、そのあまりの明るさに、彼の敵でさえ、彼の顔が御使のように輝いているのを見た。

もしわたしたちが自分の思いにもっとキリストと天の世界について考えることを許すなら、主の闘いを戦うのに力強い励みと支えを見出すのである。世の誇りと愛着は、わたしたちがまもなくわたしたちの家となるべきより良い地の栄光を考えるとときに、その力を失う。キリストの麗しさのほかは、地上のすべての魅力はほとんど価値のないものに見えるのである。

だれも、自分の側での熱心な努力なしに、神の愛の保証を得られると考えてはならない。思いが長く地上の事柄ばかりを考えることを許されていると、思考の習慣を変えることは難しい。目で見ることも耳で聞くことが、あまりにしばしば注意を引き、関心を奪ってしまう。しかし、もしわたしたちが神の都に入り、イエスとその栄光を眺めたいのであれば、ここで信仰の目を持ってこのお方を眺めることに慣れていなければならない。キリストのみ言葉とご品性がしばしば

ばわたしたちの思想と会話の主題となり、毎日一定の時間が特別にこれらの聖なる主題について祈りをもって瞑想するために捧げられるべきである。

聖化は毎日の働きである。だれも神のご要求の一つでも踏みにじっていないながら、このお方が自分たちを許し、祝福してくださると信じて、自らを欺かないようにしなさい。知っている罪を故意に犯すことは、御霊の証の声を静め、魂を神から切り離してしまう。

宗教的な感情の高揚がどのようなものであろうと、イエスは神聖な律法を尊重しない心に住むことはおできにならない。……神はご自分を尊ぶ者たちだけを尊ばれる。……ここにキリストの助けが必要とされている。人間の弱さが、神の強さに結合するとき、信仰は次のように叫ぶ。「感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜ったのである」(コリント第一 15:57) ! (清められた生涯 91 ~ 93)

3月27日

神はかけ算の計画で働かれる

「神とわたしたちの主イエスとを知ることによって、恵みと平安とが、あなたがたに豊かに加わるように。」(ペテロ第一 1:2)

もしわたしたちが神に受け入れられる品性を発達させなければ、自分の宗教生活において正しい習慣を形成しなければならない。日ごとの祈りは、現世の食物が身体的な健康のために必要であるように、恵みにおいて成長するために、また霊的な命そのものためにさえ重要不可欠である。わたしたちはしばしば思いを祈りのうちに神の許へ上げることに慣れなければならない。もし思いがさまようなら、それを引き戻さなければならない。辛抱強い努力によって、習慣はついにそれを容易にする。わたしたちは一瞬たりともキリストから離れては安全ではない。わたしたちは一步ごとにキリストのご臨在を得ることができるが、それはただ神ご自身がおかれた条件を守ることによってのみ可能なのである。

宗教が人生の重大事とされなければならない。他のすべてのことは、これに従属しているべきである。力、魂、体、霊を尽くして、クリスチャンの闘いに従事しなければならない。わたしたちは力と恵みを求めてキリストを眺めなければならない。そのとき、わたしたちはイエスがわたしたちのために死なれたのが確実であるのと同じように勝利を得ることができる。

わたしたちはキリストの十字架にもっと近く来なければならない。十字架の下での悔い改めが、わたしたちの学ぶべき平和の最初の教訓である。イエスの愛一だれがそれを理解することができるであろうか。母親の愛にまさって、無限に優しく、自己否定的な愛!もしわたしたちが人間の魂の価値を知りたければ、生きた信仰をもって十字架を眺め、こうして永遠にわたって贖われた者の科学となり歌となる研究をはじめなければならない。わたしたちの時間と夕

ラントの価値は、ただわたしたちの贖いのために支払われた贖い代の大きさによってのみ測ることができる。……

聖化は漸進的な働きである。わたしたちの前にある継続的な歩みはペテロの言葉の中にある。「あなたがたは、力の限りをつくして、あなたがたの信仰に徳を加え、徳に知識を、知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に信心を、信心に兄弟愛を、兄弟愛に愛を加えなさい。これらのものがあなたがたに備わって、いよいよ豊かになるならば、わたしたちの主イエス・キリストを知る知識について、あなたがたは、怠る者、実を結ばない者となることはないであろう」(ペテロ第二 1:5～8)。……

ここにわたしたちが決して倒れることがないと保証されている行程がある。このようにクリスチャンの恵みを得るために足し算の計画で働く者は、神が彼らの御霊の賜物を与えるのにかげ算の計画で働いてくださるとの保証がある。……神聖な恵みによって願う人はみな、地から天へ輝く踏み段を上り、ついばとこしえの喜びをいただき、歌うたいつつ」(イザヤ 35:10)、門を通過して神の都に入ることができる。(清められた生涯 93～95)

3月28日

神のみ言葉はわたしたちの 聖化の手段

「また彼らが真理によって聖別されるように、彼らのためわたし自身を聖別いたします。」(ヨハネ 17:19)

イエスが悪の力との最後の闘いに出て行かれる前に、ご自分の目を天へ向け、ご自分の弟子たちのために祈られた。このお方は言われた、「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることです。わたしが世のものでないように、彼らも世のものではありません。真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります」……

イエスのご要求の重荷は、ご自分を信じる者たちが世の悪から守られ、真理を通して聖化されることであつた。このお方は何が真理であるかに関して、あいまいな当て推量にまかされず、次のように付け加えられた、「あなたの御言は真理であります」。神のみ言葉はわたしたちの聖化が成し遂げられる手段である。そうであれば、わたしたちが自ら聖書の聖なる教えに親しむことこそ、最も重要である。

わたしたちにとって命のみ言葉を理解することが、初期の弟子たちが救いの計画について教えられたのと同じように必要である。わたしたちはもし自身自身の怠慢によって神のみ言葉のご要求について無知であれば、言い訳の余地はない。神はわたしたちにご自分のみ言葉、すなわちご自分のみ旨の啓示を与えてこられた。そして求める者にはあらゆる真理に導くための聖霊を約束された。そして真心より神のみ旨を行おうと思う者はみな、教理を知るのである。……

イエスの使命は確信させる奇跡によって表わされた。このお方の教理は人々を非常に驚かせた。……心の必要に応じるのは真理の体系であった。このお方の教えはわかりやすく、明白で、包括的であった。このお方の述べられた実践的な真理には、確信させる力があり、人々の注意をとらえた。群衆はこのお方の側にとどまり、このお方の知恵に驚いた。このお方の態度は、このお方が宣布した偉大な真理と調和していた。そこには、弁明も、ためらいも、あるいはこのお方が宣言されたとおりではないかもしれないというような疑いや不確かさの影はなかった。このお方は地上のことや天のこと、人間のことや神のことをはっきりとした権威をもって語られた。そして人々は「その言葉に権威があったので、彼らはその教に驚いた」……

何が真理かを理解することはわたしたちにとって、最も高い重要性と関心のある問題である。そしてわたしたちがあらゆる真理に導かれるようにとの嘆願が、真剣な熱心さをもってなされるべきである。

ダビデは神聖な啓発を感謝し、神のみ言葉の力を認めた。彼は「み言葉が開けると光を放って、無学な者に知恵を与えます」と宣言した。光を望む人々は、聖句と聖句を比較し、神に聖霊が照らしてくださるよう嘆願しつつ、聖書を探りなさい。求める者は見いだすというのが、約束である。(ビュー・アット・ハラルド 1911年7月6日)

3月29日

個人的な献身の必要

「だから、愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなたがたの労苦がむだになることはない、あなたがたは知っているからである。」(コリント第一 15:58)

わたしたちのただ中に聖霊の感化力が大いに必要とされている。強情な心を砕くことにおいて個人的な働きがなされなくてはならない。罪の告白へ導く深い心の吟味が必要とされている。信徒たちはこの時に、やわらげられ、聖化され、砕かれた心をもって立ち、すべての罪は悔いのない悔い改めのうちに告白されているべきである。聖霊はわたしたちの心に神の愛を灯そうと待っている。それはこのお方の讚美が、真実で、自己が無く、きれいで、正直な唇から語られるためである。聖なる原則が生活を導くとき、魂はその単純さのうちに麗しくされる。

信仰の祈りの感化力は永遠に至るほど遠大である。主は心を尽くしてご自分を求めるすべての人、キリストの模範に従おうとへりくだった魂と真剣な目的をもって奮闘するすべての人を祝福なさる。このように神性にあずかる者となることを求める人々に、次の言葉が語られる、「善を行うことに、うみ疲れてはならない」、「いつも全力を注いで主のわざに励みなさい」。神のみ約束を固くつかみ、信仰とへりくだりのうちに労する人は勝つ。全天の下で王国の偉大さは、忠実な信じる神の子に与えられるのである。……

わたしは神に対する個人的な献身と全存在の聖化の必要性を訴えるように命じられている。各々、次のように尋ねよう、主よ、キリストの警戒がわたしの生活のうちに見られ、わたしがこのお方の模範を写し、他の闇と罪の中にいる魂を助ける真心からの言葉を語るができるように、あなたはわたしに何をおさせになりたいのですか。……

すべての個々人は、自分の持っている真理を他の人々に与える義務の下にいる。何ものも、キリストの僕が自分の光を人類同胞に輝かせないようにさせるものがあつてはならない。……わたしたちは日ごとに魂をキリストの勝ち取る尊い働きをなす能力を増し加えるべきである。これはなんと尊い働き、なんと満ち足りた働きだろう！そして全天は、困窮している魂を清新にし、強める天来の油を注ぐことのできる水路を待ち望んでいる。主は、ご自分の聖なる満ちみちた徳を感謝の讚美のうちに自分たちの唇からあふれさせ、慈愛と愛の行為を通して人類を祝福するために労する人々を守り、導いてくださる。このような働き人は、神のための献身した代理人となる。

わたしはすべての信徒に言う、天の恵みをあなたの魂のうちに、あなたの経験のうちに入れなさい。これはキリストのご品性の押印である。……そして奉仕に対するあなたの報いは、あなた自身の生活のうちに優しいキリストの精神が反映されることに見出されるのである。(ビュー・アソド・ヘラルド 1909年2月25日)

3月30日

イエスがいなければ、 わたしたちはなに一つできない

「あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである。」(コリント第一 1:30)

多くの人々が隣人を自分自身のように愛することは不可能だと考えている。しかし、それはキリスト教の唯一の本物の実である。他の人々への愛は、主イエス・キリストを着ることである。それは目に見えて、見えない世界と共に歩み、働くことである。わたしたちはこうして信仰の創始者であり、完成者であられるイエスをながめつづけるのである。

愚かな金持ちに与えられた厳粛な警告は、十分終わりの時代まで至るすべての人のための警告となるべきである。すべての人を利己心から引き離し、同胞の緊密な絆と人との兄弟関係を確立するために、教訓につき教訓が主によって与えられてきた。このお方は信徒たちの心が互いに同情という強い絆のうちに密接に結びあわせられ、それによってご自身にあつて結合があることを望んでおられる。彼らは共に神の栄光の望みのうちに喜び、イエス・キリストの徳を通して永遠の命を待ち望むのである。もしキリストが心のうちに宿っておられるなら、このお方の愛がそれ自身が、それを持つ人を通して他の人へと放射され、心と心を結び合わせる。

キリストの恵みがクリスチャンの唯一の頼みでなければならない。そしてそうなるとき、彼は自分の兄弟をキリストが自分を愛されたように愛するのである。そのとき彼は「来なさい」と言っ、魂に請い願ひ、神に和解するように懇願することができる。彼の感化力はますます決定的なものとなり、彼は自分の命を、自分のために十字架にかかられたキリストにお捧げする。

愛が完成するところでは、律法が守られ、自己の場所はない。神を最高に愛する人々は、ご自分の命を自分たちのために与えてくださったお方のために働き、苦しみ、生きる。わたしたちはキリストの義を自分自身のものとするところによってのみ律法を守ることができる。キリストは「わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである」と言われる。わたしたちは天来の賜物であるキリストの義を受けるときに、神聖な恵みがわたしたちのために備えられたこと、また人間の資源は無力であることを見出すのである。イエスは大きいなる危急のために、わたしたちの弱さを助け、わたしたちに強い慰めを与え、わたしたちの思いを照らし、わたしたちの心をきよめ、また高尚にするために、ご自分の聖霊を大きな規模で与えて下さる。キリストがわたしたちの知恵、義、聖化、そして贖いとなって下さる。

クリスチャン生涯の始めから終りまで、キリストから離れては一步も成功のうちに進むことはできない。このお方はわたしたちと絶えず共にいるためにご自分の御霊を遣わされた。そして最高にキリストに信頼し、自分の意志をこのお方に明け渡すことによって、わたしたちはこのお方がどこへ行かれるとも、従うことができる。(ビュー・アンド・ヘルド 1894年6月26日)

聖霊はその感化力を受け入れやすいすべての心に働いてくださる。キリストの義はそのような人の前に行き、主の栄光はその人のしんがりとなる。(手紙 192, 1902年)

3月31日

キリストに結合し、 わたしたちはこのお方の思いを持つ

「しかし上からの知恵は、第一に清く、次に平和、寛容、温順であり、あわれみと良い実とに満ち、かたより見ず、偽りが無い。義の実は、平和を造り出す人たちによって、平和のうちにまかれるものである。」(ヤコブ 3:17, 18)

キリストとの一致があるところはどこでも愛がある。ほかのどのような実を結ぼうとも、もし愛がなければ、それらの実は無である。神とわたしたちの隣人への愛はわたしたちの宗教の本質そのものである。だれもキリストを愛しながら、その子らを愛さずにいることはできない。わたしたちがキリストに結合するなら、わたしたちはキリストの思いを持つのである。純潔と愛が品性のうちに輝き出て、柔和と真理が人生を支配する。顔の表情そのものが変わる。

魂の中に宿られるキリストは改変させる力を発揮し、外面は内を支配している平和と喜びを証言する。わたしたちは、枝が幹から栄養を得るように、キリストの愛から飲む。もしわたしたちがキリストに接木されているなら、もし繊維と繊維によってわたしたちが生けるぶどうの木であられるお方と結合しているなら、わたしたちは生ける実の房を豊かに結ぶことによって、その証拠を示すのである。もしわたしたちが光なるお方とつながっているなら、わたしたちは光の通路となり、わたしたちの言葉やわざのうちに世に対して光を反射する。

真にクリスチャンである人々は、地を天につなぎ、有限な人間を無限の神に結ぶ愛という鎖に結ばれている。イエス・キリストのみ顔に輝いている光は、このお方に従う人々の心のうちを照らし、神の栄光となる。

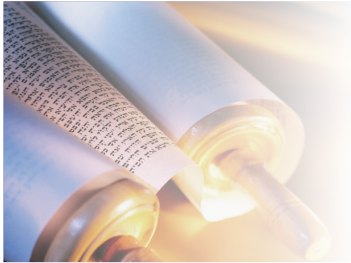
眺めることによってわたしたちは変えられる。そしてわたしたちが神聖な型であられるお方の完全さを瞑想するとき、わたしたちは完全に換えられて、このお方の純潔さのかたち新たにされたいと願うようになる。品性のうちに変

化が起こり、怒りの子が神の子になるのは、神の御子を信じる信仰によってである。彼は死から命へ移る。彼は霊的になり、霊のことを識別する。神の知恵が彼の思いを啓発し、彼はこのお方の律法から驚くべきことを見る。……神に対して従順な人となることによって、彼はキリストの思いを持ち、そして神のご意志が自分の意志となる。

自分自身をあまさず神の御霊の導きの下へ置く人は、自分の思いが広げられ、発達させられることを発見する。彼は神の奉仕において教育を得るが、それは偏った品性を発達させるような偏ったものでも、不十分なものでもなく、結果として均整と完全をもたらす。ゆれ動く意志のうちに表されていた弱さや無力な品性は克服される。なぜなら、継続的な献身と敬神がその人をキリストとの非常に緊密な関係に入れ、彼がキリストの思いを持つからである。彼はキリストと一つであり、原則の健全さと強さを持つ。(セレクトド・メッセージ 1 巻 337, 338)

研究 9

三重のメッセージ



第二天使のメッセージ

Part I

「罪と罪人からの分離」

「また、ほかの第二の御使が、続いてきて言った、「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者」(黙示録 14:8)。

「この時代になされねばならない大いなる働きがある。わたしたちは、主がご自分の民のために何をなしたいと望んでおられるかを半分も悟っていない。わたしたちは第一天使のメッセージや第二天使のメッセージについて語り、自分では何かを理解していると思っている。……しかし、わたしたちは今現在の自分たちの知識に満足すべきではない。……わたしたちは表面的な知識で満足すべきではないのである。」(ビュー・アズ・ワルド 1889年6月4日)

わたしたちはまた「罪は性質そのものが墮落している。罪という致命的ならい病に犯されている人は、その病菌を何千という人々に伝染させることも可能だ」ということを悟る必要があります(サインズ・オブ・タイムズ 1881年4月21日)

ですから、それがどんなものであっても罪から分離したいを望んでいる人々には、このような約束があります。「神は、「わたしは恨み(敵意—英語訳)をおく」と宣言された。この恨みは、人間が生まれながらに持っているものではない。……人間のうちに、サタンに対する敵意を起こさせるのは、キリストが心の中に植え付けられる恵みである。この改変の恵みと更生の力がなければ、人間は引き続きサタンの捕虜であり、常に彼の命令に従うしもべであるしかない。

しかし、心の中の新しい原則が、これまで平和であったところに争闘を起こすのである。キリストがお与えになる力によって、人間は、暴君であり、横領者であるサタンに抵抗する力を得る。だれでも、罪を愛するかわりに罪を憎み、これまで心の中を支配していた欲望に抵抗して、それに打ち勝つならば、それは、全く上からの原則が働いていることを示している。」(各時代の争闘下巻 243～245)

「今日、宗教界は憂うべき状態にある。神の恵みは軽んじられた。多くの者は、エホバの律法を廃し、「人間のいましめを教として教え」ている(マタイ 15:9)。わが国の多くの教会に、無神論が流行している。それは、聖書を公然と否認する広義の無神論ではなくて、キリスト教の衣をまとった無神論で、聖書が神の啓示であるという信仰をくつがえしている。熱烈な献身と生氣にあふれた敬神の念は、空虚な形式主義に所を譲った。その結果、背信と快樂主義がはびこった。「ロトの時にも同じようなことが起った。……人の子が現れる日も、ちょうどそれと同様であろう」とキリストは言われた(ルカ 17:28, 30)。日ごとの記事は、このみ言葉の成就を証拠立てている。世界は、急速に滅亡にひんしていた。間もなく、神の刑罰が下り罪と罪人とは焼き尽くされなければならない。

わたしたちの救い主は「あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕えることがないように、よく注意していなさい。その日は地の全面に住むすべての人に臨むのであるから」すなわち、この世に心を奪われているすべての者に。だから、「すべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい」と仰せになった(ルカ 21:34～36)。

ソドムの滅亡に先だって、神はロトに言われた。「のがれて、自分の命を救いなさい。うしろをふりかえって見てはならない。低地にはどこにも立ち止まってはならない。山にのがれなさい。そうしなければ、あなたは滅びます」(創世記 19:17)。エルサレムが滅亡する前にも、キリストの弟子たちは、この同じ

警告の声を耳にした。「エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、……そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ」(ルカ 21:20, 21)。彼らは、財産を少しでも持っていくために止まってはならなかった。彼らはそれを脱出の絶好機としなければならなかった。

それは、罪人から断固として離れて、命がけで出て来ることであった。ノアのときも、ロトのときも同じであった。エルサレムの滅亡前の弟子たちも同じであった。そして、最後の時代にも同様である。人々の間にはびこっている罪悪から離れることを神の民に命じる神の警告の声が、ふたたび聞こえるのである。

最終時代に、宗教界に見られる腐敗と背信とは、「地の王たちを支配する大いなる都」バビロンという幻によって、預言者ヨハネに示された(黙示録 17:18)。滅亡に先だって、「わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ」という招声为天から発せられる(同 18:4)。ノアやロトの時代と同様に、罪と罪人とから、はっきり分離しなければならない。」(人類のあけぼの上巻 174, 175)

だから、「彼らの間から出て行き」

「だから、「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触れてはならない。触れなければ、わたしはあなたがたを受けいれよう。」(コリント第二 6:17)。

「バビロンを構成する諸教会は、霊的暗黒と神からの離反に陥っているにもかかわらず、その中にはまだ、真のキリスト者が数多くいる。この時代のための特別な真理をまだ悟っていない人々が多くいる。自分たちの現状に満足せず、もっと明らかな光を待ち望んでいる者が、少なくない。彼らは自分たちの所属する教会の中に、キリストの姿を見ようとしても見ることができない。こうした諸教会が、真理からますます遠く離れ、世俗といっそう密接に結合するにつれて、二つのグループの人々の相違は大きくなり、ついには分離しなければならなくなる。この上なく神を愛する人々は、「神よりも快樂を愛する者、信

心深い様子をしながらその実を捨てる者」たちとは、もはや関係を保つことができなくなる時が来る。

黙示録 18 章は、教会が、黙示録 14:6 ～ 12 の三重のメッセージを拒否した結果、第二天使のメッセージが預言した状態に完全に陥り、そして、まだバビロンにいる神の民が、その中から出るようにと求められる時を示している。このメッセージは、世界に発せられる最後の器である。そしてそれは、その働きを成し遂げる。「真理を信じないで不義を喜んでいた」人々は、偽りを信じ、迷わす力に陥るままにされる（テサロニケ第二 2:12）。そのとき真理の光は、それを受けようと心を開くすべての人の上に輝き、バビロンに残っている主の子供たちはみな、「わたしの民よ。彼女から離れ去」れという招きの声に耳を傾けるのである（黙示録 18:4）。」（各時代の大争闘下巻 93）

「悪しき者のはかりごとに歩ま……ぬ人はさいわいである。……」（詩篇 1:1 ～ 3）

彼らの悪に染ませる感化力を避けて

「しばらくの間、この二種類の人々は離れていた。カインの子孫は最初住みつけた所から広がって行って、セツの子孫が住んでいた平原や谷間にまでちらばってきた。そして、後者は、彼らの悪に染ませる感化力を避けて山にのがれ、そこに住んだ。こうして離れているかぎり、彼らは神の礼拝の純粋性を保っていた。しかし、時の経過と共に彼らは徐々に谷間の住民と交わる危険をおかすようになった。この交際は最悪の結果をもたらした。……神の礼拝者の多くは、常にさらされている誘惑に負けて罪に陥り、彼ら独特の清い性質を失ってしまった。彼らは墮落したものと交わり、精神においても行為においても似てきた。」（人類のあけぼの上巻 77）

「ヘブル人が神の律法を犯すようにいざなわれ、民族に神の刑罰をもたらすことになったのは、偶像礼拝者と交わり、彼らの歓楽に加わったためであった。そのように今も、キリストに従う者を不信心な者と交わらせ、その娯楽に加え

ることによって、サタンは巧みに彼らを罪にさそい出す。「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触れてはならない」(コリント第二 6:17)。神は昔のイスラエルに要求なさったと同じように、今のご自分の民にも、風習と習慣と原則において、この世とはっきり分離することを要求なさる。神のことばが教えることに忠実に従うなら、この区別は存在し、それはあいまいであることはあり得ない。ヘブル人が異教徒に同化してはならないことを戒めた警告は、現在、不信心な者の精神と風習に、クリスチャンが同調することを禁じている警告と同様に明白なものであった。キリストはわれわれにこう語っておられる。「世と世にあるものとを、愛してはいけない。もし、世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにない」(ヨハネ第一 2:15)。「世を友とするのは、神への敵対であることを、知らないか。おおよそ世の友となろうと思う者は、自らを神の敵とするのである」(ヤコブ 4:4)。キリストに従う者は罪人と分離し、善を行なう機会のあるときだけ彼らと交わるのでなければならない。われわれを神から引き離す感化力を持つ人々との交わりを避けるについては、どんなに断固とした態度を取っても取りすぎることはない。「わたしたちを試みに会わせないで」くださいと祈る一方、できるだけ誘惑を避けなければならない(マタイ 6:13)。(人類のあけぼの上巻 72)

完全な分離

「主の名を呼ぶ者は、すべて不義から離れよ」(テモテ第二 2:19)。

「去れよ、去れよ、そこを出て、汚れた物にさわるな。その中を出よ、主の器をになう者よ、おのれを清く保て。」(イザヤ 52:11)

「バラムは、神がイスラエルに対してもっておられる特別な恩寵と、また神に選ばれた民として他とは区別された彼らの特徴を示された。彼はイスラエル人たちがその立場を保たなければならないこと、すなわち周りのすべての国々から完全に分離する立場を保たなければならないことを見た。これは、すべての真のクリスチャンが世に対して維持しなければならない関係を表している。」(サイン・オブ・タイムズ 1880年12月2日)

「キリストに従う人々は、世から出てきて、分離し、汚れたものに触れてはならないと要求されている。そうすれば彼らにはいと高き者のむすこ娘、王家の一員になるという約束がある。しかしもし彼らの側で条件が果たされないのであれば、彼らは約束の成就をみることはない。それは不可能なのである。」(教会への証 2 卷 441)

「わたしはまた、もうひとつの聲が天から出るのを聞いた、「わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ。」(黙示録 18:4)

印をつける天使

「彼に言われた、「町の中、エルサレムの中をめぐり、その中で行われているすべての憎むべきことに対して嘆き悲しむ人々の額にしるしをつけよ。」(エゼキエル 19:4)

「御使が罪と罪人から分離するすべての人の額にしるしをつけなくてはならない。そして滅びの御使が後に続き、老若共にことごとく殺すのである。」(教会への証 5 卷 505)

「墨つぼを持った御使が罪と罪人から分離するすべての人の額にしるしをつけなければならない。この御使に滅びの御使が続くのである(手紙 12、1886 年) (SDA パブル・コメンタリ [E.G. 柯什・コメト] 4 卷 1161)

「神ご自身によって、世と教会の間に、戒めを守る者と戒めを破る者との間に引かれた明確な線がある。彼らは交じり合うことがない。彼らは真昼と真夜中ほどにも違っている。彼らの好みも、彼らの目的も、彼らの仕事も、彼らの品性も違っている。」(教会への証 5 卷 602)

「わたしたち自身の一連の行動が生ける神の印を受けるか、もしくは滅びの武器によって斬り倒されるかを決定するのである。すでに神の怒りが数滴、地に注がれた。しかし七つの災いがこのお方の憤りの杯に混じりけなく注がれるときには、悔い改めて避け所を見出すには永遠に遅すぎるのである。そのときには罪のしみを洗い流すための贖罪の血はない。」(教会への証 5 卷 212)

すべてのクリスチャンのモットー

「シャデラク、メシャクおよびアベデネゴは王に答えて言った、「ネブカデネザルよ、この事について、お答えする必要はありません。もしそんなことになれば、わたしたちの仕えている神は、その火の燃える炉から、わたしたちを救い出すことができます。また王よ、あなたの手から、わたしたちを救い出されます。たといそうでなくても、王よ、ご承知ください。わたしたちはあなたの神々に仕えず、またあなたの立てた金の像を拝みません。」(ダニエル 3:16～18)

「魂を罪で汚すよりは、貧困、非難、友人との別離、またどのような苦しみであってもそちらを選びなさい。神の律法を辱め、犯すよりは死を、というのがすべてのクリスチャンのモットーであるべきである。改革者だと公言し、最も厳粛な、魂を清める神のみ言葉の真理を蓄えている民として、わたしたちは現在よりも標準をはるかに高く掲げなければならない。教会の中にいる罪と罪人は、他の人々が悪に汚染されることがないように、すみやかに処分を受けなければならない。真理と純潔はわたしたちが陣営をアカンたちから清めるためにもっと徹底的に働くよう要求している。責任のある地位についている人々は、兄弟のうちにある罪を容認してはならない。彼に自分の罪を取り除くか、もしくは教会から離れなければならないことを示しなさい。」(教会への証 5巻 147)

神はわたしたちのためになし得ることをすべて成し遂げられた

「わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、何かなすべきことがあるか。」(イザヤ 5:4)

「神は神がおできになることをわたしたちのためにすべて成し遂げられた。キリストはあなたをご自分の血で買い取られた。このお方は贖い代を支払われた。それはあなたが神と結合し、罪と罪人から分離することができるためである。」(上を仰いで 25)

「ああ、わたしたちは、民として、かつてなかったほどに主を求め

ることができる。ああ、わたしたちは自分の罪を捨て、自分の誇りを打ち砕き、そして魂の悔悟をもって余すことなくキリストの許に身を投げ出し、わたしたちに価値があるからではなく、このお方がわたしたちのために死んでくださったために、このお方は今ただちにわたしたちを受け入れて下さると信じることができる。神はキリストの名をもって呼ばれるすべての者は悪から離れることができると保証しておられるのである。神がわたしたちのためになすことがおできになることはすべてなされた。イエスは今、ご自分がそのために苦しみ、死なれた民をご覧になり、こう仰せになる。「わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、何かなすべきことがあるか」(サインズ・オブ・タイムズ 1883年9月27日)

「わたしたちの贖い主が罪人を救うために苦難の杯を飲まれることに同意なさったとき、このお方は限界まで苦難をお受けになったのであった。……わたしたちのために死なれることによって、わたしたちの負債に相当する対価をお支払いになった。こうしてこのお方は神から罪深さを軽減しているという責めをことごとく取り除かれた。このお方は、わたしが御父と一つであるという徳によって、わたしの苦難と死は、罪の報酬を支払うことができる。わたしの死によって、神の愛から抑制は取り除かれる。このお方の恵みは存分に力を発揮して働くことができる。

キリストはわたしたちの贖い主であられる。このお方は、肉体となり、わたしたちのうちに宿られた言であられる。このお方は、わたしたちがあらゆる不純を洗い、清めることのできる泉であられる。このお方は人間の和解のために払われた高価な犠牲であられる。天の宇宙も、墮落していない世界も、墮落した世界も、また悪の同盟軍も、神は人間の救いのためになされたこと以上にもっとなすことがおできになったはずだと言うことができない。このお方の賜物を越えるものは何一つなく、これ以上深い愛を豊かに示すことは決しておできにならない。カルバリーは、このお方の最高のみ働きをあらわしている。人間が得られるようにして下さった主の祝福、大いなる救いを自分のものとすることによって、このお方の大いなる愛に応えることが、人間のなすべき分である。」(彼を知るために 69)

天には罪も罪人もない

「真理を信じる者として、わたしたちは罪と罪人から、行いにおいて区別されているべきである。わたしたちの市民権は天にある。」(クリスチャン教育の基礎 481)

「人は、罪を犯す前には「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」(コロサイ 2:3) キリストとの交わりを楽しむことができた。けれども罪を犯して後は、もはや聖いことを楽しめなくなり、神のみ前から隠れようとした。今日でも、新生を経験しない人の状態はその通りで、神と一致していないため神と交わることを喜ばないのである。罪人は神のみ前では楽しむことはできない。彼らは、聖い者らとの交わりを避けようとする。たとえ天国にはいることが許されても、少しも喜びとはならない。天国では無我の愛の精神が満ちみちていて、限らない神の愛をすべての心が反映しているのであるが、そうした精神も、罪人の心にはなんの感動も与えないのである。そして、その思想も興味も動機も天国に住む罪なき者らの気持とは全く異なっている。彼らは天国の美しい音楽と調和しないものとなるのである。天国はあたかも苦しいところのように思われ、光であり喜びの中心である神のみ顔を避けようとするのであろう。悪人は天国に入れないというのはなにも神が独断的に定められたのではない。それは、彼らが自らそうした交わりに不適當なものとなってしまったからである。神の栄光は、罪人にとっては焼きつくす火である。罪人は、自分たちを贖うために死なれたキリストのみ顔を避けて滅ぼされたいと望むようになるのである。」(キリストへの道 14, 15)

(82 ページの続き)

へ上ったが、上って行く途中(とちゅう)、小さい子供らが町から出てきて彼をあざけり、彼にむかって「はげ頭(あたま)よ、のぼれ。はげ頭よ、のぼれ」と言ったので、彼はふり返(かえ)って彼らを見、主の名をもって彼らをのろった。すると林の中から二頭の雌(め)ぐまが出てきて、その子供らのうち42人を裂(さ)いた(列王記2:23, 24)。神様の忠実(ちゅうじつ)なしもべをからかうことは、非常に悪(わる)いことです。このとき、この悪い行為はただちに死(し)を意味(いみ)しました。

音楽(おんがく)の声

讚美(さんび)はすばらしいものです。「祭司長、律法学者たちは、イエスがなされた不思議なわざを見、また宮の庭で『ダビデの子に、ホサナ』と叫んでいる子供たちを見て立腹し、イエスに言った、『あの子たちが何を言っているのか、お聞きですか』。イエスは彼らに言われた、『そうだ、聞いている。あなたがたは「幼な子、乳のみ子たちの口にさんびを備えられた」とあるのを讀んだことがないのか」(マタイ21:15, 16)。

わかい人たちの声ほど純粹でうつくしい声はありません。そして子供たちが自分の声を用(もち)いるのに、自分の創造主(そうぞうぬし)であり、あがない主であるお方に讚美とほまれをささげるよりよい方法(ほうほう)はありません。神様があなたにしてくださったすべてのことを感謝(かんしゃ)しましょう。それを言葉にしてのべ、歌にしていきたいと思います!

かぼちゃの南蛮漬け

〔材料〕

かぼちゃ 1/2

◎長ネギ 1本(粗みじん切り)

◎昆布だし(粉末) 1/2袋(2グラム)

◎水 200cc

◎しょう油 大さじ4

◎レモン 大さじ3

◎はちみつ 大さじ1

◎たかの爪 少々

サラダ油 適量

〔作り方〕

1. 南蛮酢を作ります。◎の材料をボールに入れて混ぜます。
2. かぼちゃはなかわたを取り、7～8ミリに切って、サラダ油でやや固めに炒め揚げにします。
3. かぼちゃを1の南蛮酢に入れます。

温かなくても冷たくてもおいしいです。茄子でもあいますよ。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)



【公開放送】 <http://www.4angels.jp>

聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】 聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】 は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



子供がもの申(もう)す!

聖書は子供の価値についてたくさんのべています。しかし、聖書の中**聖**の子供たちがいつもたくさん話しているとは限りません。彼らがなると言ったかはあまり書かれていません。でも、いつも黙っていたわけではないことを知っています。ここにいくつか例があります。

伝道者だった召使

ナアマンの家の少女は、神様のために証(あかし)しました。彼女はスリヤ人の将軍(しょうぐん)のらい病(びょう)をなおすための医者(いしゃ)ではありませんでしたが、彼にイスラエルにいる預言者(よげんしゃ)をさし示したことによって、神様の力について知るのをたすけたために、天国(てんごく)で報(むく)いられるでしょう。「さきにスリヤびとが略奪隊(りゃくだつたい)を組(く)んで出てきたとき、イスラエルの地からひとりの少女を捕(とら)えて行った。彼女はナアマンの妻(つま)に仕(つか)えたが、その女主人(おんなしゅじん)にむかって、「ああ、御主人(ごしゅじん)がサマリヤにいる預言者と共におられたらよかったです。彼はそのらい病をいやしたことでしょう」(列王記下 5:2, 3)。神様の力を信じるじぶんの信仰(しんこう)をのべることによって、彼女は大きなちがい生むことができました。



あざける群衆(ぐんしゅう)

この物語は、それほどうれしいものではありません。……神様がエリヤを天へつれていかれたことを聞いた子供たちのグループが、エリヤのことをからかうために声をあげたのです。預言者は、「そこからベテル